

# ワルキューレ奇行

√ワルキューレ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

北欧神話最後の日となるはずだったあの日、狂った炎に対抗するためオーデインは一人の勇士を生み出した。

あれから三千年。

停止した世界で、勇士ヴィズルは異聞帯最後にして唯一の英雄として召喚される。

召喚されたはいいが倒すべき敵が（まだ）いない。

世界唯一の勇士なので、ワルキューレに興味を持たれあれやこれや

……基本、ワルキューレといちゃつくだけです。

|     |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 8話  | 7話 | 6話 | 5話 | 4話 | 3話 | 2話 | 1話 |
| 102 | 92 | 76 | 60 | 47 | 35 | 19 | 1  |

目次

## 1話

### 「英霊」

人類史に名を刻んだ英雄達が、死後、その魂を座に迎えられて成立する精霊にも等しい超越者。人類の歴史を影から守る力そのものであり、人々が夢見た輝かしい伝説のカタチだ。

汎人類史に於いて、魔術師たちは英霊をサーヴァントという形で召喚する術を編み出した。聖杯と呼ばれる万能の杯を呼び水として、座の英霊から格落ちさせた分霊のような状態ではあるが、限定的に英雄の姿と人格、宝具すらも再現してのけた。

この術式を最初に生み出した者は、まさしく神域の天才であったのだろう。

吹雪が激しく窓を揺らす極寒の大地に建つ城の中で、スカサハハスカデイはどこか楽しげに杖を振るう。

人間の女性と同じ姿をした彼女は、その実、人間ではない。

姿容は美しい女性のそれ。冷厳な眼差しに母の如き慈愛の宿す彼女には正しく人格があり、知性がある。しかし、その身に宿す魔力の膨大さ、異質さは彼女を目にしただけで常人を震え上がらせ、その場に跪かせることだろう。

人の姿をした超越存在。

先にした英霊、あるいはサーヴァントすら霞む存在感は、彼女がただそこにいるだけで並の英霊を凌駕していることを意味している。

英霊は、英雄の魂が昇華したものであるが、絶対ではない。彼等彼女等の上位には神霊という神々の成れの果てがいる。虚ろな神々の影たる神霊は、英霊を遥かに上回る高次元の存在だ。

しかし、スカサハハスカデイは神霊とも違う。

確かな形がある。肉があり、魂がある。彼女は虚ろな神霊ではなく、この世界に残された最後の——正真正銘の神なのだ。

人々が神話に語り、信仰を捧げるべき女神。スカサハハスカデイとは、ラグナロクを越えた先に君臨する世界最後の女神にして支配者なのだった。

スカサハⅡスカディは慎ましやかに杖を振るう。

まるで音楽を指揮しているかのよう。弾むような杖先は、虚空に文様を編み上げる。

「さてさて、準備は完了。ヴァルハラ最後の勇士、切り捨てられし者どもの悪あがきを見せてやろう」

ラグナロクは来なかった。

北欧神話の世界は、かの破滅から三千年もの長き時を継続した。

神々の黄昏は、その役割を放棄して暴走した炎の巨人と共に大きく形を変えた。オーディンの最期の力を振り絞った原初のルーンにより、炎の巨人は、北欧神話を残したままで封じられた。滅びを回避した世界は、しかし繁栄を許されなかった。どうあっても行き詰まる世界。宇宙から不要と断じられた、余分。それが、この世界だ。何もしなければいずれは滅び去ることが確定した世界。宇宙の法則によって、神たるスカサハⅡスカディですら覆せない消滅の未来が約束されている。

「愛そうか、殺そうか。世界を終わらせぬために、ここに最後の勇士を召喚しよう」

謳うように紡ぎだされるそれは、見るものが見ればサーヴァントの召喚陣だと答えただろう。

複雑精緻な召喚陣。

英霊の座にアクセスし、サーヴァントとして特定の英霊をこの世に呼び出すためのものだ。

しかし、それは汎人類史に於いて可能なものであって、この北欧神話の世界でサーヴァントは通常は成立しない。

何故か。

それはもともと英霊が存在しないからだ。

英霊、即ち生前に偉業を成した英雄の魂は来るラグナロクに備えてワルキューレに導かれてヴァルハラに集められる。故にこの世界には英霊の座は成立せず、ラグナロク以後の世界でも英雄が誕生するよ  
うな事例は一つもなかった。

唯一、ラグナロク直前、かの巨人王スルトの暴走に際して誕生した

一人の勇士を除いて。

汎人類史で完成したサーヴァントの召喚術式と崩壊したヴァルハラと、そして原初のルーンを組み合わせてスカサハIIスカディは一人の勇士を呼び出した。

狂った世界の象徴。正しい歴史、神話には存在しない最後の勇士だ。

「サーヴァント、シールドダー。真名をヴィズル……求めに応じ参上した」

かつてのあの時、燃える世界で父なるオーディンと共に巨人に立ち向かった最後の勇士。その時の姿をそのままに、彼は召喚陣から現れた。

神の盾と槍を携えた戦士である。狂った炎の巨人と相対するためオーディンがその叡智を注いで作り出した男性体ワルキューレでもあるという。いずれにしても、彼は異聞帯北欧世界の最後の勇士であることに間違いはない。

「その顔、ああ、懐かしいな……こうして、言葉を交わすのは初めてだ。この世界の事は、分かっているだろう？」

「はい、一応は。与えられた知識にあるとおりなら、ですが。神代のテクスチャが継続した世界だと」

「ああ、その認識があればよい」

勇士の召喚に成功したスカサハIIスカディは、とりあえず安堵した。戦力は大いに越したことはない。ラグナロクに備えてワルキューレが集めたエインヘリヤルは、すでにないのだ。

勇士はこのヴィズルただ一人。しかし、今となつてはエインヘリヤルのすべてを足し合わせても彼には届くまい。

「それで、俺が殺すべき敵は何処に？」

「おらぬ」

「はっ」

「そなたの仕事は、この世界を守る事。しかし、いずれ来るカルデアなる汎人類史の者どもであつても、軽々しく殺める事は許さぬ。愛そうか、殺そうか、それを見定めるまでは、な」

「なるほど、承知しました」

ヴィズルは主の命を受諾した。

元より、彼の性質はワルキューレのそれに近いのだ。オーディンが生み出した対スルト宝具とも言うべき彼の戦闘能力は、極めて高い。汎人類史に於ける特Aランクのサーヴァントとも戦えるだろう。しかし、この世界の絶対者は、闘争を戒めた。母性とも言うべき感情なのか、それはヴィズルには分からない。神に意見するのは愚行だし、主の考え方をこまごまと詮索する必要性まで感じてはいない。

それに、彼にインプットされているのは第一にスルトの打倒である。それ以外は瑣事であった。



召喚されたはいいものの、戦うべき相手がいないというのは「勇士」として由々しき事態だった。

闘争こそが人生のすべて。戦って、派手に戦死するのが北欧の勇士の仕事と言っても良かった。もちろん、それはラグナロクへの備えであって、ラグナロクが到来しなかったこの世界では必要性がない。

氷の城の窓から外を見ると、見た事もない光景が広がっている。激烈なる戦いから三千年の月日が流れたのだという。世界は真っ白に染まり、木々ですら氷の塊に等しく、命と呼べるものの少なさに絶句する。

この世界の事は、大方頭に入ってはいる。召喚時に与えられる知識が、スカサハ||スカディとワルキューレたちの三千年の苦難を教えてくれた。

争いのない三千年。しかし、ただ生きるだけでも困難な環境での三千年だ。平和ではあったが、平穏とは言い難い。

「俺の知らない世界だな」

三千年を経て、こうなったわけではない。

スカサハ||スカディの力によって運営、維持されているからこうなったのだ。権能の在り方の問題であった。雪に閉ざされた世界で、

人間はそう長く生きられない。というよりも、高齢者を受け入れるだけの余力がない。命を選別し、年少者のみで回さなければならぬ世界だった。なるほど、どこまでも行き止まりだ。ギリギリのところまで運営している自転車操業であった。

ヴィズルの知る北欧世界は、もつと激しかった。生存競争の厳しい世界ではあったが、同時に命に溢れていた。この世界のように時が止まってはいなかった。まったく異なる世界に迷い込んでしまったかのようにであった。

振り返れば人間として生き、戦い、死に、ワルキューレに見初められてエインヘリヤルの一員となったのがつい先日のことだった。ヴィズルには、三つの人生があった。

一つは、人間の戦士として生きた人生。二つは、死後、エインヘリヤルの一員となり、ヴィーグリーズの野で巨人達を迎え撃った人生。三つは、暴走したスルトに対抗するため、オーデインの力で対スルト宝具として生まれ変わった人生だ。

スルトと戦い命を使い果たした彼は、役目を終えて消え去ったはずだったが、何の因果かこうしてシルダーのサーヴァントとなって現界を果たした。

不思議なこともあるものだ。

神のいない世界など想像したこともなかった。

いつだって、神々は自分達を見守ってくれているものだったし、彼等のために戦えるのならば以上の榮譽はない。

しかし、ここはどうも勝手が違うようだ。カルチャーギャップに困惑するばかりだった。

「頭の中に知らないはずの知識が入ってるってのも、気持ち悪いもんだ」

自分の常識、知識から外れた情報がインプットされている。それを当然のものと受け入れている自分がいて、ヴィズルは顔を顰める。

三千年の間に生じた変化を、頭で知っているが実感が得られていないのだ。

氷の城を散策していると、ふと視線を感じた。背後を振り返ると、



フードを被ったワルキューレが佇んでいた。金色の短髪と赤い瞳の少女の姿をしている。

「ワルキューレの一人か」

「……はい。スカデイ様より、勇士様のお世話を仰せつかりました」  
「お世話？」

「身の回りの事をせよ、と。三千年前とは勝手が違うところもあるだろうとの仰せです」

「そうか、それは助かる」

ヴィズルの知るワルキューレとは異なる雰囲気だ。美しいが機械的だと思えた。ヴィズルもオーデインによってワルキューレに近いものへと変じたが、彼女たちは生まれついてそういう性質なのだ。

「お部屋のご案内をいたします。どうぞ、こちらへ」

「部屋？」

「勇士様は、この城に常駐なさると伺っております」

「そうなのか。」

「そういえば、そこをまったく確認していなかった。ヴァルハラは、この時代にはすでにないのだ。となれば、この城が、当世のヴァルハラということか。」

「大きな城も、利用する者はそう多くない。スカサハⅡスカデイとワルキューレ以外の住人はいないのだ。おまけに、外部から客が来ることもない。部屋は有り余っているのだ。」

「使われていなかったにしては、手入れが行き届いているな」

「昨日から調度品を設えてお待ちしております」

「そうなのか？」

「いつ勇士様を召喚なさるのか決めるのは、スカサハⅡスカデイ様です。勇士様の召喚に合わせて部屋を用意するよう命を下されたのです」

「そうか。それも、そうだな」

スカサハⅡスカデイが、ヴィズルを召喚したのだ。召喚の日程を定めていれば、それに向けて準備をしておくのは当然だった。

「そうだ、名乗っていないかった。俺は、シールダーのサーヴァント、

「ヴィズルだ。君の名前は？」

「わたしはワルキューレです」

「それは知ってる。その上で君の名を聞いているんだが……？」

「個体名称ということでしょうか？ それは、ありません。わたしはあくまでも量産型です」

「量産型、ね。それは、知ってはいるが……」

「量産型に個体間の差異はありません。容姿、能力は同一ですし、記憶も経験も共有しています」

「記憶もか？ すると、この会話も含めてか？」

「はい」

ワルキューレはあっさりとそれを認めた。

「ヴィズルとしては、なんともやりにくい事この上ない。ここで、彼女と話をしても、彼女は別の個体と繋がっていてすべてが筒抜けなのだ。」

「では、その記憶やらなにやらの共有を解除することはできるのか？」  
「可能です」

「なら、俺と一緒にいる時は解除してくれ。情報の筒抜けは、あまり、いい気がしないからな」

「承知しました。同期、解除します——同期解除完了しました、勇士様」

「どうも、他の個体との同期はすぐに解除できるらしい。」

特に苦勞することなく、手続きを終えた。

「そんなあっさりと解除できるんだな」

「はい。もちろん、再度同期することも可能です」

「そうか。便利なもんだ。特に戦場で、味方同士が常に思考を共有できるってのは、強みだな」

「そうなのでしょうか……？ わたし達量産個体は、勇士様の仰る戦場を知りません」

「ああ、そうか。俺たちが死んだ後は、ろくに戦もない時代だったんだっただったな」

「はい。わたし達に与えられた仕事は、人間の魂を運び、人口を調整す

る事だけです」

人口調整。この世界の人間は、すべてスカサハⅡスカデイの管理下に置かれている。一定の年齢に達した者は、集落の外を出て巨人のエサになるのが定めだ。

「しかし、見た目も性格も同じとなると、話をする上で困る事が多い」「何故ですか？」

「君に話をしようとしても、他のワルキューレとの見分けがつかないからだ……と言っても分からないか」

ワルキューレ達の感性とヴィズルの感性は違う。個体差がないので、ワルキューレ達には個というものもない。個人の見分けがつかないことが困るという意味が分からないだろう。

彼女たちにとっては全員が自分自身なのだ。ひとつの大きな意思が複数の身体を動かしているようなものなのだろう。

しかし、ヴィズルにとっては身体ごとに別人なのが常識だ。量産型ワルキューレとヴィズルとの間には人間と真社会性昆虫レベルの認識の差があるのかもしれない。

「ともあれ、俺と行動を共にするのであれば、俺に合わせてもらう。そうだな。まずは個体名をつける事から始める。君の事は今後ラグズと呼ぶことにするからな」

「この身体の名称ということでしょうか？」

「……まあ、それでいい。理解が早くて助かる」

「承知しました。個体名、ラグズ。以後、そのように」

彼女自身には何の感慨もないのか、あっさりとしてそれを受け入れた。拒否する必要も感じていないという事だ。

ラグズと一応の呼び名を決めた後、ヴィズルは彼女からこの世界の事を聞いた。もともとの知識だけでは足りない部分を補うためだったが、大きな収穫はなかった。

それもそうだろう。彼女の視点はある意味で神の視点だ。感情はなく、人間と巨人の生活を天から俯瞰しているだけだ。それならば、召喚時に付与された知識となんら変わるところがない。目新しい情報も特になかった。

「勇士様、この後は如何なさいますか？」

「とりあえず、寝る。色々と外を見てみたいが、まあ、明日からだな」  
窓の外は暗くなっている。

サーヴァントとは便利なもので、食事の必要もない。ヴァルハラでは、夜に宴会、昼に殺し合いの日々だったので、食事をしてもいいのだが、空腹を感じないので寝ることにした。

睡眠すらないのが不思議な感覚だが、徒に起きていても時間を無為に消費するだけだ。

部屋には上質なベッドが設えてある。戦いを本分とするヴィズルには不釣合いな代物で、これも生前には縁のなかつたものだが、今は思う存分に使っていいたい。

「承知しました。お召し物を準備いたします」

ラグズはルーンを使って着替えを一瞬で用意する。

「これはいい」

一枚布のローブだ。肌触りがよく、軽くて丈夫だ。魔術で作成されたらしく、守りのルーンが編みこんである。これを一瞬で用意する当たり、ワルキューレのルーン魔術は相当に高度だ。

ヴィズルは手渡されたローブにさっと着替える。やはり寝るときは楽な格好がいい。ヴィズルは、ベッドに横たわると、ほどよい反発力が伝わってくる。体重をしつかりと受け止めつつ、沈み込みすぎない良質なベッドだ。

サーヴァントだからか眠気はまったくなくないが、睡眠には精神を休める意味もある。召喚されて与えられた知識を整理するためにも、一度眠ってしまったほうがいい。

「ラグズは部屋に戻らないのか？　もう夜も遅いが」

「ワルキューレに睡眠は不要です。また、個別の部屋もありません」

常に何かしらの活動をしているということだろうか。しかし、この停止した世界ではすることもないだろう。

「することがないときは、どうしてるんだ？」

「機能を一時的に停止しております」

「それは寝てるってことでは？」

やはり価値観が違うのだろう。

彼女は、自分を機械として認識している。一つの命だという理解はないのだ。

「じゃあ、これから朝までどうしてるつもりだ？」

「勇士様と添い寝をします」

「……どうして、そうなるんだ？」

「ワルキューレの職責を果たします。ワルキューレは勇士様をヴァルハラに導き、お世話をするのが本分です。わたしも、その機能に則りご奉仕いたします。スカディ様からのお許しも出ております」

確かに、ワルキューレの中には勇士の求めに応じて身体を重ねる者もいた。

ヴィズルもエインヘリヤル時代には、何度も経験がある。しかし、召喚されたばかりで相手はヴィズルの知るワルキューレよりもずつと機械的なものとなったワルキューレだ。人間味を感じないので、まいち乗り気にはならない。

ならないが——ヴィズルも男だ。しかも相手はワルキューレである。北欧の戦士が一度は関わりを持ちたいと思っ相手である。

「そう、なら、相手をしてもらおうかな」

と、ヴィズルは欲望に負けた。仕方がないのだ。彼とて北欧の戦士なのだ。ワルキューレを抱きたいというのは、当たり前前の感覚だ。

ラグズはフードを脱いだ。露になった顔は、やはり美しい。金色の髪に真っ赤な瞳が妖し光を放っている。ラグズは、ベッドに膝を突いて登り、仰向けになったヴィズルの下半身に手を伸ばした。

小さなラグズの手の中で、半勃ちになったヴィズルのペニスを、彼女はゆっくりと扱き始める。

「……口で、ご奉仕します」

ラグズは、手淫をしながら舌先で亀頭を舐め始めた。ぞわぞわとした感覚が、ヴィズルの背筋を這い回る。適度にざらつく舌は、人間のそれを変わらない。ラグズの愛らしい唇から赤い舌が這い出して、ペニスをペロペロと舐め回している。

「れる……れる……れる……れる……れる……」

しかし、愛らしい少女に奉仕されるといっただけで男冥利に尽きるの  
ではあるが、如何せん上手くない。彼女のフェラは単調で、とにかく  
同じところを舐めているだけという感じだ。気持ちイイには気持ち  
イイが、物足りないのが正直なところだった。

「どうか、されましたか？」

「そういえば、経験がないんだったな、と思って」

「はい。わたしは、勇士様方がいなくなった後の世界で生産されまし  
たので、知識はありますが実際にお相手するのは初めてになります。  
わたしの奉仕に何か誤りがありましたか？」

「いや、誤りはないが……」

フェラをされれば、気持ちよくなるだろうし、そのうち射精もする  
だろう。しかし、それは満足感とは別物だ。

「そうして奉仕するのなら、俺をもっと気持ちよくしてもらわないと  
な」

「今のままでは、不都合であるか？」

「不都合ではないが、もう少し緩急をつけて欲しいな」

「緩急ですか」

「それと、同じところばかり舐めるのではダメだ」

「そうですか。申し訳ありませんでした。それはで、どのようにする  
べきかご教示いただけますか？」

「教えるのか、俺が……うーん、仕方がないか」

ラグズの表情には一切の変化がないが、それでもワルキューレの本  
懐を遂げようとしている。彼女たちに備わった勇士の接待をする  
という本来の性能をこころざしばかりに活かそうとしているのだ。機械  
的な対応とはいえ、そのように求められたら、応えずにはいられない。

「そうだな、まずは先端を舐めてみる」

「はい……れる……れる……れる……」

指示をするとラグズは素直に実行する。可愛い舌が鈴口をペロペ  
ロと舐め始めた。

「次にその裏側を先端に向けて、だ」

「承知しました」

裏筋から鈴口までをじっくりと舐め上げる。ゆっくりとした動きが、ペニスに舌の感触をしっかりと味わわせている。敏感な亀頭がぞくぞくと震える。

「時に舌を速くしたりゆっくりにしたり調整するんだ。舐めるだけでなく、唇も使って奉仕するんだ」

「れろお……ん、唇……ん、ちゅ……れろ……はあ、れろ、れろ……ペろ、れろ、ちゅぷちゅぷ、れろ」

「いいぞ、飲み込みが早い」

もともとインプットされていた機能なのだろうか。ラグズはヴィズルの命令をそつなくこなしている。陰茎にキスを落とし、鈴口を吸い、ペニス全体に舌を這わせて舐め回す。

右手の親指で裏筋をマッサージしながら、頬張るように睾丸を口に含んで舌で弾く。ラグズの上達具合には、ヴィズル自身が驚くくらいだ。

あつという間に、ラグズはペニスへの口奉仕をマスターしつつあった。

「れろ、れろ、れろ……ん、んむ……」

ちゅぷ、と水音を立ててラグズはヴィズルのペニスを口に含んだ。

「うお、急に」

「んちゅぷ、お嫌、でしたか？」

「いや、続けて」

「はい——ん、む……ちゅ、ん、じゅる……ちゅる、ちゅる、じゅる……ん、ん、くぷ……」

温かくぬるぬるとしたラグズの口内で、ペニスが玩ばれている。口の中で、彼女の舌がねつとりと愛撫してくる。鈴口から裏筋、そしてその反対側まで縦横無尽にラグズの舌が駆け回る。ヴィズルの指示を待たず、どんどんとフェラの技術を応用して伸ばしているようだった。

「勇士様、何やら苦い液体が出て参りましたが」

「ああ、気持ちよくなってきた証だ」

「そうなのですか？ でしたら、このまま継続します」

無表情のままラグズはフェラを続ける。

じゅるじゅると音を立てて、頭を前後に振る。激しさはないが、その分ゆったりと彼女の口内を味わえる。ぬらりとペニスを舌が絡みつき、頬を窄めてカウパー液を啜られると腰が砕けそうになる。

ぞくぞくと駆け上がったってくる射精感に慌てて口からペニスを抜こうとしたヴィズルだったが、間に合わなかった。

ラグズが啜り上げた時の刺激で、せり上がっていた精液はそのまま彼女の口内に飛び出してしまった。

「んん!？」

びくり、と震えたラグズであったが、そのまま口を離さず、口内で射精を受け止めた。溢れんばかりの精液を、ラグズは嚥下する。

「ふ、う……ん……ちゅぷ……はあ……」

ペニスから口を離れたラグズは、口の中に残る精を飲んで呼吸を整える。

「今のが、勇士様の精なのですね」

「大丈夫か？ 初めてだろうに」

「いえ、毒というわけでもありませんし、ベッドを汚すわけにもいきませんので……んッ」

そこで、急にラグズが唇を引き結んだ。

「どうした？」

「分かりません。急に体温の上昇を確認しました。このような感覚は今までにありません……はあ、あ……」

それまで、ずっと無表情だったラグズの顔に赤みが差した。

目がとろんとして息が荒くなる。

「ラグズ、ちよつと見せてみろ」

と、ヴィズルは命じる。ラグズは、命令の意図が理解できなかったものの、拒否する理由がないので自分の腰布を捲り上げた。

そして、案の定、ラグズの陰部から愛液が太ももを伝って流れでいるのが見て取れた。驚いたことに、ラグズはヴィズルの精を飲んで、発情していたのである。



「勇士様？」

「ああ、そのままです」

自分の身体に生じた異変を理解できないでいるラグズ。彼女の陰部をヴィズルは指で刺激する。

「んツ!？」

びくん、とラグズは全身を強張らせた。

「どうした？」

「今、声が勝手に……申し訳ありません。身体の反応が、いつもと違う……ふ、うツ」

ヴィズルの指先がラグズの膣口に触れる。膣口から滴る愛液が指を濡らし、ラグズは小さく呻いた。

すつかり、準備ができてしまっているようだ。指の感覚でクリトリスを探し出し、優しく摩つてみる。

「はあツ……あツ、あツ、そ、こ……ツ！」

敏感な部位から未知の感覚が頭に流れてくる。ラグズの脳内にスパークが生じ、足がガクガクと震えた。

「ここ、普段触れることないのか？」

「はい……ここは、勇士様を受け入れるための器官であると、知っておりますが、その機会がなかったもので……ふ、う、んんツ。で、ですが、それも、もう困難、あ……ゆ、勇士様を受け入れる事が、できそうにありませんツ、ふう、うツ」

ぎゅつと唇を噛み締めて、ラグズは言った。

「どうして?…ここまで来て?」

「申し訳ありません……しかし、この常にはない感覚……き、機能不全を起こしている可能性が……あツ、う、そんなに触れられるとツ」

「機能不全だなんてとんでもない。これは、正常な感覚だ」

「正常?…しかし、こんな感覚は知りません。制御が利かないのは、異常としか……!…ふう、あ、ああツ!」

ラグズの膣内がきゅつと締めまり、ヴィズルの指を圧迫する。指だけで、絶頂してしまったのだ。

「い、今のは、いったい……」

頭の中で何かのはじける感覚。身体中の筋肉が制御不能に陥り、勝手に痙攣してしまう。何もかもが未経験だった。機械的に存在してきたラグズにとつて、自分の身体が制御不能となるのは、機能不全としか思えなかった。

「今のが絶頂、イクということだよ。勇士の相手をするのなら、その感覚くらい知っておかなければならないだろう」

「今のが、絶頂？ この感覚が、そうなのですか……わたしの機能に支障が出ているわけではなく……？」

「ああ。男を受け入れるだけの素養があるということでもある」

未だ、理解できない事のほうが多い。

自分の身体の事なのに、何一つ分からないのだ。身体の奥の熱は、まだまだ昂ぶったままだ。ヴィズルに触れられて、「快い感覚」を味わったものの、それが何なのかいまいち実感できていない。

「とにかく、俺も良かった。君がただの機械ではないと分かったからな」

「わたしはワルキューレです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「そうだな」

そう言いつつ、ヴィズルはラグナをベッドに押し倒した。

彼女の初心な反応を見ていたら、すっかりペニスも勃起してしまっ

た。

「勇士様のペニスが、また……」

「ああ、君があまりに愛らしいから、こうなってしまった。挿入させてもらうぞ」

「……承知しました」

ラグズ、少し悩んでから頷いた。

身体の反応は機能不全ではないようだが、どこかに不調があるかもしれない。ヴィズルは大丈夫だと言うが、一応調べたほうがいいのではないかと思っただのだ。

いつもならば、同位体とリンクしてこの程度の異常などすぐに解決するのだが、今はそれができない。となれば、ワルキューレの仕事を

こなすのを優先するべきだと判断した。

ヴィズルのペニスが、ラグナの膣口を抉じ開ける。一度、オーガズムを経験したために膣内の潤いは十分だった。

「う……あッー… んんッー」

思わず声が跳ねる。

ラグズの膣内に押し込まれたペニスが、彼女の小さな膣肉を押し広げて根元まで入り込んだのだ。処女膜が破れて血が滲むが、痛みそのものは大した事がない。

「はあ、う、ん……」

(これが、性交ですか。わたしの内部に勇士様のペニスが結合している。若干の苦しさがありますが、しかし……)

その先は、思考が続かなかった。

ヴィズルが腰を動かし始めたからだ。

「あ、う……ん……ふう……はあ……あッ……ん、くう……ん、ふあッ……はあ……」

ペニスが前後する度に、先ほど感じたものよりも大きな刺激がラグズを襲った。ゆつくりとしたストロークだが、その分だけ力りがしつかりと媚肉を引っ掻いていく。また押し込まれるときには奥深くまで味わうように入ってくる。亀頭の先端が子宮の入口付近までやって来て、ぐりぐりと圧迫してくる。

「ふうう……はああ……あ、あ、んあッ、ん、ふう、はあ……んん……ゆ、勇士様、はあ……これ、さつきより、んん、刺激が、強い」

「本番だから。指よりもこっちの方が太いしな。苦しいか？」

「あ……はい……息が、止まりそう、んんッ、あ、ふうあ、はあ……ん、んん」

「なら、止めるか？ どうする？」

「い、いいえ。続けてください。ワルキューレの職責を、果たさなければ……ん、それに、今、止められたら、下腹部の熱が、はあ、んん、あ！ ん、深い……ふう、んん……あ、んあッ」

徐々に、ラグズの声が大きくなってきた。

呼吸が荒くなり、抽送するたびに膣肉がペニスに絡みついてくる。

ラグズ自身も気付かないうちに、両足でヴィズルの腰を押さえつけていた。

ズンズンと突かれると、自分が自分ではなくなるような感覚に襲われる。喉から今まで出したことのないような声が溢れ出てしまう。

「きやう♡ ん、ふう、はあ、はえあ……あ、勇士様、勇姿様あ、はあ、んあ、はあ、それ、そこ、ズンズンされると、わたし、機能がおかしくなってしまう……はあ、はあ、んあ、はあ、ふうツ！ はあ、くひあ、あ、あああ！」

最初期の無表情がどこへ行ったのか、淫蕩な表情を浮かべて口を半開きにし、嬌声を上げている。ラグズは、未知の快樂に対処する術を知らず、襲い掛かる快感に流されるままになっているのだ。

ラグズの膣内は、初めてとは思えない気持ちよさだった。温かい膣肉が、程より力加減で締めてくる。腰を引けば、逃がさないように絡みつき、押し込めば、侵入を許さないとばかりに抵抗してくる。肉壁をカリが引つ掛けるところは何ともいえない快感だった。

「ん、はあ、はあ、はあ……んん！ ふう、はあ、んああ……あツ、ん、ふうあ、あ、はあツ♡ あ、あ、な、何か、来るツ。ゆ、勇士様、先ほどの、イク感覚が、また……んん」

「そうか。なら、思い切り果てていいぞ。俺も、そろそろだ」

「あ、あ、あ……これ、大きい……！ こんな、あ、いけません、こ、このままでは、エラーがツ、あ、んん！」

かつてない快感の予感にラグズは恐怖した。

感情が一定しない。肉体の自由が利かない。何もかもが、未知。情報不足している。自分の身体が、どうなるのかまったく予想ができない。予想できないままに、与えられる快樂が限界値を突破する、昇りつめて、果てる。

「ふぐ、あ、はああああああああああああああああああ♡」

ラグズは、この日一番の嬌声を上げた。

ヴィズルの白濁液が膣内に注ぎ込まれた。強烈なオスの魔力が胎内を蹂躪する。快感がさらに加速して、目の前がチカチカと明滅す

る。

「あ、あ、あ……ふぐあ、あ♡ ま、魔力が、勇士様の魔力がわたしの  
臍内に、いっぱい……♡ あ、また、い、く……あ、あ」

ラグズは笑みを浮かべながら身体を痙攣させた。

身体を内側から汚染されているようだった。しかし、それが苦ではない。体力を大幅に使ってしまったが、無駄とは思えなかった。むしろ、有益。快楽、快感、そういうったもの。今まで触れたことのない感覚にラグズは、戸惑いながら満足感を覚えていた。

「はう……あ、これが、気持ちイイという事なのでしょうか」

「そうだな、きつとそうだ。果てたのなら、そうなのだろうな」

「そうですか、これが……はあ……こんな、感覚は初めてでした。勇士様も、気持ちよくなっていただけでしたか？」

「ああ、よかった」

「そうですか。ワルキューレの職責を果たせたようで、よかった、です」

ラグズは、ほっとしたように安堵の吐息を漏らした。

セックスする前の機械的な無表情さは和らいだようだ。

ラグズは、自身の内部にいくつものエラーを見つけたが、削除する必要はないと判断した。その理由は彼女自身も分からない。それは、本来、量産型ワルキューレには必要のない感情という機能の一部が解放されたという事であった。

## 2話

ヴィズルが召喚された翌朝、ベッドから起き上がるとラグズが「おはようございます、勇士様」と待っていたかのようには挨拶をしてきた。昨夜の乱れようが嘘のように、淡々とした口調に戻っている。

それをヴィズルは残念に思いながら、ベッドを出て鎧を着た。ヴィズルの基本装備は神鉄製の鎧と盾、そして槍だ。

ヴィズルは英霊としては極めて特殊な存在だ。生前と今で、まったく存在の基本骨子からして異なっている。

生前、それも人間だったときの記憶はあるが、実感はない。魂からオーデインに作りかえられたヴィズルは、記憶にある勇士と完全な同一人物ではないのだろうか。詳しい事は分からない。ただ、彼を基にして形成された勇士というのは間違いない。

「外に行く」

昨日は召喚されたばかりということ、城の外まで見ていなかった。与えられた知識を確認する意味も込めて、散歩することにする。

城の扉を開けて、外に出ると突き刺すような寒気が肌に染み入ってくるはずだったが、そうでもない。サーヴァントとは便利なものだ。真つ当な人間なら、防寒具なしでは凍死する気温である。

氷でできた長い一本橋。城の全景。それらは、まるで御伽噺に出てくるかのような荘厳さがあった。そして、不自然に巨大な太陽――

「ん……う？」

太陽に違和感がある。

大きいのがそもそもおかしいのだが、それとは別に何か、奇妙な――

「勇士様」

「何だ、ラグズ」

先ほどからぴったりとくっついてくるラグズに声をかけられる。

「どこに行かれるのでしょうか？」

「そう言われると、決めてないといしか言いようがないなあ」

「目的地なく城の外に出るのは不可解です。体力と魔力を余分に消費するものと思われまます」

「いいんだよ、それでも。余分は余分でいいんだ」

「無駄は省くべきではありませんか？」

「ワルキューレにはないかもしれないけど、無駄を愉しむのが人間なんだ。まあ、俺は人間じゃないけどな。それに、三千年で景色ががらっと変わったからな」

見晴らしのよい氷の橋の上から、ヴィズルはぐるりと周囲を見回した。遠くの間から近くの林まで、どれを取っても記憶になるものとなっている。

山々の稜線の形くらいだろうか、記憶のそれと辛うじて合致するのは。

「了解しました」

「何が？」

「勇士様は、来る戦に備え、地形を目視で確認するために外出なさるのですね」

「……ああ、まあ、そうだな。それでもいい」

ラグズなりの解釈で納得したらしい。

ヴィズルが歩き出すと、五メートルほど後ろをラグズが歩いてついてくる。

止まると、ラグズも止まった。

「付いてこなくてもいいんだぞ？」

「わたしは、勇士様のお世話をするようにとの命を受けております。勇士様はこの時代に不案内かと思えますので、道案内も必要ではないでしょうか」

フードに隠れた赤い瞳を輝かせ、ラグズは言った。

「道案内か。それも、いいか」

この時代の情報は頭に入っているし、凍死も餓死もないこの身体ならば、そうそう面倒なことにはならないはずだ。試していないが戦闘能力もかなり高いはずである。巨人族が出てきても、問題にはならないだろう。

しかし、あえてラグズの申し出を断わる理由もない。彼女がどう思っているかは検討もつかないが、昨夜情を交わした相手だけに、ヴィズル自身にはそれなりの思い入れはある。

ルーン魔術を使えば深い雪道でも軽々と歩くことができる。実に便利だ。

高度なルーン魔術も、息をするように扱うことができるのは、ヴィズルにもワルキューレとしての性質が一部反映されているからだ。

おまけにその力は、彼女たちの中でも最高性能の個体であるブリュンヒルデに匹敵する。大神オーディンの直伝なのだ。

その稀有な力を、雪道を歩くのに使うという何とも罰当たりなことをしているヴィズルだが、ルーン魔術そのものは道具としか思っていない。

結局、どれほど強力な魔術でも日用雑貨と同じ程度の扱いでしかないのだった。

なお、ラグズは雪道を歩くのは効率が悪いということであわふわと浮いている。

「この雪、すべてが女王様の力か」

「スカデイ様の魔力によつて運営されている世界です。この雪が降り積もる場所すべてが、スカデイ様の知覚圏内です」

「つまり、この白い世界のすべてを女王様は監視できるってわけか」

この世界に降り積もった雪は、ただの雪ではなくすべてがスカサハⅡスカデイの権能によるものであり、この雪は彼女の監視装置といふべきものであった。

彼女はこの世界の支配者で、この世界の人間のみならず巨人も魔獣も我が子同然に愛している。その愛は本物だ。

繁栄は望むべくもない。女神の権能を駆使しても、この世界は現状維持が精一杯なのだ。

外に出るから、いろいろと試してみたが、魔力の探査が上手く行かない。ヴィズルの扱う原初のルーンであっても、今は神の権能の中にあるようなものだ。基本的にスカサハⅡスカデイのほうが格上なの



で、一部の魔術は本調子とはいかない。

歩いていく中で、ラグズからは多くのことを聞いた。

この世界の三千年の歴史だ。

長い年月を、人間と巨人族の人口の維持管理に費やしてきた。ワルキューレも今は勇士の魂を運ぶのではなく、単に一定の年齢に達した人間を死に導く死神と化していた。彼女たちはそれを役割と信じて疑わなかったし、事実、それが今のワルキューレの仕事であり、存在理由だ。そして、ヴィズルはそれに異を唱えない。神が定め、運営する世界の理だ。ヴィズルがとやかく言うものではない。この時代にはこの時代に即したあり方があるのだと考えるだけだ。

どこまで行っても氷の森が続くだけだ。まっとうな獣もこの世界にはいないという。巨人と魔獣、そして——二羽のワタリガラス。あれは、かつてと変わりないようだ。

「勇士様。前方から巨人が来ます。すでにこちらを認識している模様」

「向かってくるのなら、迎撃するしかない……ん、そういえば、殺すなだったな」

スカデイはどうも殺生を嫌うらしい。神様らしい巨大な愛は、巨人たちにも向けられている。食物連鎖は許容するが、ヴィズルが彼等を一方的に殺戮するのは好まないだろう。

「霜の巨人三体、攻撃態勢に入りました」  
「見れば分かる」

ここは彼等の縄張りだったのだろうか。生憎と巨人の言葉は分からないが、どうも敵視されているらしい。巨大な氷の塊を投げつけてくる。狙いは思ったよりも正確だ。五百キロはあるうかという氷塊は、ヴィズルを傷付けることなく後方に転がっていく。ラグズを抱えて真横に跳んで、力技の暴威をやり過ぎしたのだ。

ラグズを離して大きく跳躍。

大身の槍で、巨人が振り回す氷の槍を叩き砕く。怯んだところで、額に睡眠誘導のルーンを刻んだ。まったく脅威を感じないままに、三体の巨人を眠らせたヴィズルは、ぐるぐると肩を回す。

この程度では、性能試験にすらならない。オーデインが、全力を振り絞って生み出した勇士の戦闘能力は、巨人の雑兵程度では相手にもならない。

「勇士様……お見事、です」

「これが、あの巨人か」

三千年前、激烈な戦いを繰り広げた相手。世界を滅ぼす神々の仇敵たる巨人族。それが、たとえ雑兵であろうとも、こんなに弱くていいはずがない。

積み重ねた歴史は、彼等から知性と力を奪ったのだろうか。

ただ、この世界で殖えるに任せて、種族としての繁栄はまったくなく、無為に生きてここまで来たというだけか。

確かに、神々のいないこの世界には、彼等の敵は存在しない。天敵がいない生物は、戦うための知恵すら失うのだろう。

おまけにあの仮面。あれは、スカサハ||スカデイの手によるものだ。ともかく、巨人はかつてほどの脅威ではなくなっていた。それが、悲しくもあった。

「行こうか」

「はい」

時折吹雪きがやって来た。

天気がよくても、風が強いと地吹雪が起きて視界を白く染め上げる。しかし、まったく苦労はしなかった。サーヴァントの肉体は寒さに強く、ルーン魔術を使えば大自然の猛威もそよ風のように受け流せた。

ただの人間の勇士だった頃は、今頃雪に穴を掘るなり、洞窟を探すなりしていただろう。それを考えると不思議な気持ちになった。

そんなことを考えていたら、雪山の中腹に洞窟を見つけた。

「あれは……そうか、懐かしいな」

すでに過去の記憶だ。それも、オーデインに作りかえられる前の勇士だった頃の話である。

「懐かしい、とはっ」

「あの洞窟は、覚えがある。俺の前身が、あそこで身を休めたことがあ

るんだ」

それは三千年も前のことだ。

まだ、この世界が完全に雪で覆われていなくて、土と岩がむき出しだったころのことである。この場所で、戦争があった。人間同士の戦争だが、魔獣も参戦していたと思う。部族と部族の激突で、飼いならされた魔獣同士も戦場を闊歩していた血みどろの戦いであった。

そこで、ヴィズルの前身となる勇士は戦い抜いた。多くの敵将の首を落とし、魔獣共を両断した。槍一本を相棒にして、鬼神のように戦い血の雨を降らせたのだ。

その果てに、勇士は洞窟に辿り着いた。戦いは終わったが、勇士自身も傷ついていた。身を休める場所が必要だった。

戦争の結果がどうなったのか、勇士はもう覚えていない。勇士の人としての記憶は、この洞窟の天井を見上げたところで途切れていた。

「つまり、俺の前身となる勇士は、この洞窟で息絶えたんだろう」

記憶を頼りに雪に覆われた山肌を登ってみる。大雪が降り続く世界で、洞窟の入口はどういうわけか、今でもぽっかりと口を開けていた。

中に入ってみると、記憶にある洞窟がそのままに残っていた。三年の月日が経ったとは思えなかった。奇妙というには奇妙だった。さすがにそれだけの月日が流れれば、多少なりとも風化があつてもいだろう。しかし、この洞窟の内部はそれこそ時が止まっているかのようだった。壁には赤黒い血の跡すら残っている。間違いなく、勇士が流した血だった。

「どうした？」

ヴィズルはふと背後を見遣る。

黙ったままのラグズを不審に思ったのだ。

「あ……いえ」

珍しく歯切れが悪いラグズは、視線を洞窟内に彷徨わせた。

「別に珍しいものでもないだろう」

「ここに来たのは初めてです」

「そうなのか？」

「はい。この山そのものは知っていましたが、用があったわけでもありませんので」

量産型ワルキューレは機械的に物事に対処する。趣味もなければ、物事への好悪もない。与えられた仕事をただこなすだけの存在だ。

だから、洞窟の存在を知っていても、用事がなければ立ち入ることもない。人間ならば、興味本位に山に登り、洞窟を探検することがあるかもしれないが、彼女たちにそういった思考回路は存在しないのだ。

「分かりません」

「何が？」

「今、脳内に正体不明のノイズが発生しています。明確に言語化できませんので推測ですが、これは喜ばしい、と言えるのではないでしょうか」

「俺に聞かれても何とも言えないからなあ……しかし、何でそんなことになってるんだ？」

「不明です」

と、ラグズは、機械的に回答した。

「状況から考えれば、この洞窟が勇士様に縁のある洞窟であると確認できたからだと思われれます」

「そういうものか？」

「可能性としては、です」

自らの感情を完全に理解できていないラグズは、彼女なりに感情の言語化に努めていた。己の内側に発生したノイズを感情であると解釈したのは、ヴィズルと接していたからだろうか。急速に、ラグズは個性を手に入れつつあった。

壁についた血痕が、傷ついた勇士の流した血の多さを物語っている。それほど傷を負いながら、彼は戦い抜いたのだという。まさしく勇士だ。ラグズの知らない、人間同士の抗争。勇士と勇士のぶつかり合いは、ワルキューレの魂すら焦がすものだったのだろう。エインヘリヤルに導かれるほどの活躍を、その勇士はここでしていたのだ。

「あ……」

きゅん、とラグズは肉体的変化を自覚した。

下腹部と頬に熱を感じた。心拍数と血流の増大。呼吸量増加。肉体が何らかのエラーを吐き出している。ワルキューレの本能が刺激されているのだ。

「ラグズ？」

「勇士様……わたしの身体にエラーが生じております。この感覚は、昨夜のそれと酷似しています」

「昨夜……まさか、あれか」

「……勇士様にご奉仕しなければならぬ。ワルキューレの職務をここで果たすべきだと、エラーがそのように訴えているのです」

身のうちに生じたエラーを忌諱するでもなく、ラグズはそう言った。

勇士の過去に触れたことで、ワルキューレの本能が目覚めたのか。かつての誰かが勇士を見出し、その魂をヴァルハラへ運んだように、ラグズもまたワルキューレの一員として、勇士の魂に強く惹かれていた。その勇士がエインヘリヤルに至った瞬間を保存していると思しいこの洞窟は、彼女の本能を強く励起している。

それは、本来エラーと呼ぶようなものではない。彼女が言うとおり、ワルキューレの職責の一つだ。勇士を選定し、導くワルキューレは勇士に強く惹かれる習性があるのだ。

それを、ラグズを初めとする量産個体は今まで知らないまま三千年の月日を過ごしてきた。ラグズは、ただ、その習性がもたらした変化に戸惑っているだけなのだ。

「勇士様、身体が熱くなっています。昨夜のように、勇士様と繋がりたい、です」

真紅の瞳を熱っぽく潤ませて、ラグズが訴えてくる。

ラグズにとっては、初めてのことばかりだ。無味乾燥とした、機械的な存在だったラグズは、感情という未知に触れて対処できなくなっていた。

「こんな洞窟で、男を誘うものじゃないぞ」

それでも、ラグズの肌にはヴィズルは手を伸ばす。頬に触れて、髪を

梳く。白く透き通った肌。金色のさらさらとした髪。桜色の唇。どれをとっても美しかった。

「ん……んん」

ラグズはヴィズルに触れられて、くすぐったそうに顔を背ける。まるで小猫のようで、愛らしかった。

「ラグズ。こっち、向いて」

ヴィズルはラグズの頤を上げさせて、唇を奪った。

「んッ……ん、ちゅ……あ」

軽くキスをするラグズはぼうっとした表情を浮かべた。

「今のは、口付けですね」

「知ってた？」

「はい……知識としては」

ラグズは小さく頷いた。

「不可思議な行為です。生殖器に触れるでもなく、子ができるわけでもない無意味な接触行為です」

「身も蓋もないな……」

ヴィズルは苦笑した。

確かに、口付け自体に生殖器への接触はない。子作りという観点では無意味だろう。

「ですが、それが好ましい行為であるとも理解しています」

と、言うや否やラグズは自ら背伸びをしてヴィズルにキスをした。

「当該接触行為による心拍数の上昇を確認しました」

「そんなことまで、分かるのか」

「わたし自身の心拍数です。把握に問題はありません」

また、もう一度ラグズは口付けを求めてきた。唇同士が触れるだけのキスで物足りないが、ラグズは自らの感覚を確かめるように触れて離れるのを二度、三度と繰り返した。

「ちゅ……んちゅ……はあ……はあ……。快い感覚があります。昨夜の結合とは、また異なる感覚が……」

自らの唇を指でなぞり、不思議そうにするラグズ。

そんな彼女の唇を、今度はヴィズルが強引に奪った。

「はむ、ん……ちゅ、んちゅ……はう、ん、ちゅ……ちゅぶ、はあ、はあ……ああ、れる……」

ディープキスも一応は知っていたようだ。舌先を触れ合わせて様子を見てから、ヴィズルはラグズの口内に舌を侵入させた。

「ちゅぶ、れる……ふ、う、ん……ん、ちゅ……れる、れる……んふう、ちゅ……あ……ん」

ラグズは、ヴィズルの舌を受け入れて、自らゆつくりと舌を絡めてくる。

「だ液を交換し、唇を犯し、舌を吸いあつた。唇を離すと、粘つく糸が両者の舌を繋いだ。」

「はあ、はあ……あ……勇士様……わたし」

「ああ……壁に手を突いて」

「ん……」

ラグズは、期待感に目を潤ませ、頬を上気させる。

言われるがままに洞窟の壁に手を突いて、形の良い尻をヴィズルに向けた。

衣服を肌蹴させると、よほど興奮していたのか、すでにラグズの陰部は濡れていて、太ももまで愛液が滴っていた。

「いやらしいワルキューレだな、もうこんなになつてるなんて」

「申し訳ありません。口付けで、身体が内側から熱くなつてしまいました」

「謝る必要はないよ」

すっかり大きくなったペニスを、蜜壺の入口に宛がう。いやらしくひくつく陰部に、ヴィズルは自らの分身をぐいっと押し込んだ。

「ん——あああッ♡」

ラグズの嬌声は、洞窟の中に響いていく。

「狭くてキツイな」

昨晚、初めて男を知ったラグズの膣内は、まだ処女であるかのようキツイ。その一方で、ワルキューレの本能であろうか、勇士のペニスを挿入されて、膣肉は悦び、目茶苦茶に締め付けてくる。

「ぶぐ、ん、んんッ……あ、つい……勇士様の、ものがッ……！ あ、

はああ♡」

熱を帯びた白い吐息を漏らすラグズ。

低温環境で肌を曝しても、何の問題もないのだ。ラグズの呼吸が荒く、激しくなっているのは、彼女が吐く白い息で分かる。

そんなラグズの膣内を、ヴィズルは掘り返すようにして何度も抽送を繰り返した。

「あっ、あっ、あっ、んんっ……ん、く、あ、あ、んあ、あ、ふぐう♡

んああ、あ、んん、んん、ふう、はあ……んくあ、あ、んああ♡」

「昨日よりも感じてるみたいだね」

「分かり、ません♡ ん、ふう、んんん！ あ、声、が止まらない……

勇士様が、動いたたびに、わたし………どうにか、なつてしまいたいそう、で……ッ。ん、ふう、はあ、ああッ！」

パンパンパンと尻肉を両手でしっかりと固定して腰を打ちつける。角度をつけて奥深くまで押し込んで、カリで肉襞を引つ掛けるようにして腰を引く。

熱いラグズの膣肉は、すっかりヴィズルのペニスに適応してしまつたかのようだった。

「んはあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、んふう、ふ

わあ♡ あ、勇士様♡ 勇姿様あ♡ もつと、もつとお」

ラグズの表情は淫蕩に歪んでいた。口の端からだ液を零し、膣肉を引き締めながら自分でも腰を振つてヴィズルを誘った。

「うあ、わたし、何、を……ふぐ♡ あ、こんな、おかしい、です、んんッ」

「何が、おかしいんだ？」

「それは、ん、ふう、あ、あ、わ、ワルキューレは、こんな風に、んん、望んだりはない、ふう、あ、はあん♡」

昨夜以上にいつそう乱れた嬌声を上げるラグズは、両手で身体を支えられなくなつたのか、身体を壁に押し付けて快樂に耐えている。

しかし、それでも膝がガクガクと震えて、立っているのもやつとだった。

ラグズの困惑は、その言葉と表情から伝わってくる。



ワルキューレ、特に量産型は感情が希薄だ。与えられた役目を淡々とこなしていく働き蟻のようなものだ。ゆえに好き嫌いもなく、望みもない。勇士をヴァルハラへ導くというその一点が、望みといえれば望みなのか。

だからこそ、ラグズは戸惑っているのだ。「もつと」などと、欲を口にしてしまったことに。

「ふう、ぐ……んあ♡ あ、んんう、ふうあ、あ……ふ、ああ♡ んん、ふぐ……んふう、んあ、はあ、ふひツ……ん、んん、んん、ふう、はあ、ああつ……あ……く、う、うう、ん、んん、あ、ああ、はあ、ん、ああッ！」

嬌声と水音が響く。

ラグズの膣内で、ヴィズルのペニスは四方八方からむしゃぶりつかれて快楽に猛っている。ラグズの小さな膣内は、ヴィズルによつて押し広げられ、しかし緩まることなくしつかりとペニスを啜え込んでいる。ラグズの意味に関わりなく、彼女の女がヴィズルの男を求めているのだ。

「あふ、んふ、ふう、はあ、う、んん、おお……♡ 腹部が、内側から広がって……勇士様を、感じます♡ はあ、んあ、う、あ……うあ、ふん、ふう……はあ、う、あ……んん、激し、い……ああ、うお、ん、む、ふう、くふああ♡」

喉奥から意図しない、言葉にならない音が漏れ出している。昨夜と同じ、いや、それ以上に身体が制御困難であった。ヴィズルのペニスに貫かれるたびに、表現のしようのない感覚が背中から頭に上つてきて、目の前が真っ白になる。それが、何度も何度も繰り返されていて、ラグズは思考そのものが纏らなくなってきた。

「あ、あ、ああ、また、来るッ。あの感覚、イク……ッ」

急速に湧き上がってくる情動が、ラグズに警鐘を鳴らした。

しかし、彼女はそれを堪えようとはしなかった。昨日の今日である。さすがに有害と無害は分かっている。これはむしろ有益だと思つた。何より、我慢などできるはずがない。

「イクのか？ いいぞ、思う存分に」

「はいっ。はいっ。イキ、ます。ぞくぞくが、登ってきて、わたし……ふぐツ……あ、はああ♡」

「ん、くう」

ラグズの膣内がいっそう強く引き締まった。ぎゅつとペニスを絞られて、ここぞとばかりにヴィズルも射精する。

精液が膣を犯し、子宮にまで流れ込む。その魔力が、一気にラグズの全身を満たす。

「ふぐあ、あああああああッ。イク、い、イキますッ、あ、もう、無理、で、はあ、ああああああああああああああああああああ♡」

ガクガクとラグズの膝が震えて、潮を吹いた。かなりの快感を覚えていたようだ。膣内が何度も震えて痙攣しているようでもあった。

「うあ……うあ……あ……」

絶頂の余韻に満たされて、ラグズはずるずると壁に体重を預けたまま崩れ落ちる。それをヴィズルは支えて、衣服を整えてから座らせる。

ラグズは、荒くなつた呼吸を整えながら、体内の熱に思いを馳せる。

ヴィズルに抱かれる直前まで、身体が熱を持っていて苦しかった。

抱かれてからも熱を帯びているが、しかし、苦しさはない。むしろ、多幸感すら抱いている。——幸福など、感じることにすらありえないはずの量産型でありながら。

あるいは、自分は欠陥品なのかもしれない。いずれにしても、スカサハIIスカデイには報告が必要だ。もしかしたら、ヴィズルは自分の欠陥を見抜いて他のワルキューレとの同期を控えるよう言ったのかもしれない。

そんなことを思考の片隅で思いながら、ラグズはヴィズルの次の命を待った。



ヴィズルを召喚したぞ、とスカサハスカディに報告されたのは、彼の勇士の召喚から一日と少し経ってからだった。

女神は、事のついでとばかりの言い草だったが、彼女が長年勇士を召喚する魔術の研究をしていたのは知っていたから、大願成就の言葉を並べた。

この世界にワルクューレは二種類いる。

全員同一規格で作成された量産型ワルクューレと神代から今までの三千年を生き延びた古きワルクューレの生き残りにして、量産型を統括する統率個体のワルクューレだ。

量産型は百騎以上いるのに対して統率個体は三騎しかいない。

それぞれスルーズ、ヒルド、オルトリンデという個体名を有し、その名は汎人類史の神話物語にも記されている数少ない「名のある」ワルクューレだ。

ヴィズル召喚の儀に立ち会えなかったことにヒルドは文句を言っていたが、それは仕方がない。統率個体にも仕事はある。今回は、全員が席を外して立ち会えなかったのだ。

初めましてになる量産型と違い三千年前から存在する統率個体は生前のヴィズル——その前身となった勇士を顔を合わせたことはある。

城内を足早に進むのは、黒髪のワルクューレだ。ショートヘアと煌々と輝く赤い瞳が印象的だ。彼女の個体名称はオルトリンデ。古くから存在する統率個体のワルクューレである。

彼女はヴィズルを召喚したというあっさりとした報告を受けた後で、他の姉二人を置いて勇士の姿を探し始めた。

マスターであるスカサハスカディは、どういうわけか知らないという。何か隠している風でもあったが、そう言うのならば、問い詰めはしない。

代わりに近くを通りかかった量産型を捕まえて、ヴィズルの居場所を尋ねた。

「情報はありません。今朝方から外出なさったようですが、行き先は不明です」

「外出……一人ですか？」

「世話役を任じられた量産型が一騎、供をしているようですが、同期していないので状況は不明です」

妙な話である。

量産型が相互の同期をしないなど、三千年の間にはなかった話だ。

オルトリンデからも、その量産型への同期を試みたが、どういうわけか拒否されている。接続に失敗してしまったのだ。統率個体の命令を独自に拒絶できるような設計はされていないはずだ。現に他の量産型との同期は、一秒と掛からずにできた。外にいるという一騎だけが、オルトリンデとの同期を拒否している。

「あ、いた」

城内を歩いていると、ばったり件の量産型と出くわした。ワルキューレにとって量産型の個体区別に意味はないが、同期していない者を見分けるくらいは簡単だ。

「その量産個体、少し、いいですか？」

「統率個体オルトリンデ、何でしょうか」

呼びかけられたラグズは、ちょうどスカサハスカディの下に向かう途中であった。

「先ほどから同期を拒否していますね。何かありましたか？」

そう問われたラグズは、小さく「あ……」と呟いた。

ヴィズルと一緒にいる間、同期機能を落としていたのだが、それを戻すのを失念していたのだ。

「何でもありません。勇士様の命で、同期機能を停止していました」

「勇士、とはヴィズルのことですね？」

「その通りです。ご存知ですか？」

「はい。生前から……今、あの人はどこにいますか？」

「今はお部屋に戻られています。外に出ていなければ、在室しているらっしゃるでしょう」

これほど長く量産型と話をしたことはない。基本的に意思疎通は会話を必要としないからだ。

しかし、事ここに至ってもラグズが同期機能を戻さないから、オル

トリンデは言葉で情報を引き出すしかなかった。

「……ヴィズルの魔力を、あなたから感じます。外で何かありましたか？」

「……いいえ。——特に何も」

ラグズはそう答えてから、

「強いて報告するとすれば、巨人種との戦闘ですが、勇士様は一方的に彼等を眠らせて鎮圧なさいました」

と、戦闘報告だけを行った。

「そうですか」

「これから、スカディ様のところに行かなければなりません。失礼してよろしいですか？」

「分かりました。引き止めてしまって、すみませんでした」

「失礼します」

ラグズは小さく会釈をしてその場を後にした。

オルトリンデは、ラグズの受け答えに小さな違和感を覚えながら、その背中を見送ったのだった。

### 3話

ラグズはオルトリンデと別れた後で、スカサハスカデイの下に向かった。

ヴィズルといるとき自分の身体に生じた異常を確かめるためだった。

オーデインの手による統率個体と異なり、量産型のワルキューレはスカサハスカデイの手によるものだ。大本のシステム自体はオーデインが組み上げたものではあるが、肉体は女神が手がけている。

ラグズは失念していた。

先ほどのオルトリンデとの会話の中で、彼女はオルトリンデに嘘をついた。

通常ならばありえない動作だったが、ラグズは意図的にオルトリンデへの報告を怠ったのだ。

勇士の洞窟での行為が、頭を過ぎったが、それを報告しなかったのはラグズの意思だった。しかし、それでは致命的なエラーとなると直感し、直後に巨人種との戦いを報告した。

そんなラグズに対して、スカサハスカデイの回答は「気にするな」だった。

それは、ラグズが機能停止しても問題はないということだろうか。所詮は量産型だ。代わりとなるものはいくらでもいる。そう受け取ったラグズに対して、呆れたように女神はため息をついた。

「お前のそれは致命的なエラーでもなんでもないのだ。知性あるものならば、誰しも有するものだ。量産型ワルキューレである、そうラグズにも、それが芽生えたことを嬉しく思っているのだぞ」

と、慈愛の如き言葉を投げかける。

もちろん、ラグズには理解できる内容ではなかった。言葉としては分かったが、実感としてはまったく欲しかった。

しかし、女神はそれ以上を口にはしなかった。

まるで、子どもの成長を見守る母のように穏やかな笑みを浮かべるばかりだ。

ラグズの中に芽生えたものを、スカサハⅡスカデイが明確化するとは簡単だ。愛だの恋だの色欲だの、名付けようと思えばいくらでも言葉は出てくる。しかし、ラグズは———というよりもワルキューレたちは単純だ。自分の中の新たな感情をラベリングすれば、そこ止まりだろう。辞書的に解釈し、辞書的に対応するに決まっている。ならば、放置する。

芽生えたものがどのように育てていくのかは、ラグズ次第というわけだ。

彼女にとってそれが一番だ。

せっかく、自我が現れつつあるのだから、大事に大事に育てていかなければならない。

母性を露にする女神にとっては、ラグズの変化は見ていて喜ばしい。召喚して二日と経たず、ここまで大きな変化をもたらしたヴィズルには、感謝しておく事にしよう。

「では、とり急ぎ対処の必要はないという事ですね？」

「その通りだ。そして、疑問は大切だ。その気持ちを持つことができたのは幸運だったな」

「幸運ですか」

「幸運だとも」

勇士のいない止まった世界で生まれたワルキューレの中で、初めてラグズは自らの疑問を持ち、感情の端緒を得たのだ。それを幸運と言わずして何と言うか。

「さて、少しばかり仕事が残っていてな。ラグズ、手伝ってもらえるか？」

「承知しました」

やはり、機械的な口調で返答するラグズ。その表情に若干の感情を窺うことができ、スカサハⅡスカデイは、満足げに頷いた。



ラグズとの情事を終えて、城に帰還したヴィズルは、一人自室に戻っていた。

北欧世界の変わりように驚きはしたが、悲しみはなかった。かつてを偲ばせるモノは、あの洞窟のみで他はすべてが変わり果てた。本来ならば、やはり悲しむべきなのだろうか。それとも、ラグナロクを回避して、多少なりとも命が残ったことを喜ぶべきなのだろうか。

ドアがノックされたのは、そのような物思いに耽っていたときである。わざわざ、この部屋を訪れる者がいるとすれば、ラグズか主人たる女神くらいのものだが、現れたのはヴィズルにとって予想外の相手だった。

ラグズではなかった。フードの下の顔は、まったくの別人で、黒髪赤眼のワルキューレだった。

「……■■■■、久しぶり、です」

と、彼女は言葉を詰まらせながら話しかけてきた。その顔に覚えはあった。

生前の彼と親交のあったワルキューレだ。ヴィーグリーズに繰り出す直前まで、勇士は彼女と共にいた。その記憶が確かにある。

「覚えていますか？ ■■■■……？」

黙っているヴィズルに不安を覚えたのだろうか。彼女は、重ねて問う。

「オルトリンデ」

「あ……はい」

ヴィズルが彼女の名を呼ぶと、オルトリンデは嬉しそうに顔を綻ばせた。こんな表情をするワルキューレだっただろうか。あの決戦から三千年の月日が経っているのだという。それだけの時間をオルトリンデは存在してきたのだ。長い年月を生きながら、少しずつ感情をずっと育ててきたのだ。

「よかったです。覚えていてくれたんですね」

「……ああ。記憶はある。そう……あの洞窟で、俺は君に見つけてもらったんだったな」

「そうです。戦いの気配を感じて向かって先で、わたしはあなたを見



つけました。あの洞窟の中で、血を流しながら横たわるあなたを、わたしはヴァルハラへ連れ帰りました」

今日、ヴィズルが記憶に導かれて辿り着いた洞窟は、オルトリンデとの出会いの場でもあったのだ。

生前の記憶が、少しずつ蘇ってくるようだった。かつてと変わらないう、しかし少し柔和になったオルトリンデの顔は、ヴィズルの胸中に郷愁の念を思い起こさせた。

「あなたが、大神により新たな存在の階段を登ったことも承知していません。あの時——炎の巨人を相手に、あなたは最後まで戦った。偉大な勇士、様」

「オルトリンデ……すまない。君は、三千年前のことを鮮明に覚えているのかもしれないが、俺は父なる大神によって魂を組み替えられている。記憶はあるが、生前の実感まではないんだ。先ほどから君は俺の名を呼んでいるのだろうが、俺にはノイズとしか聞き取れない。君と過ごした勇士の名を、俺は認識できないみたいだ」

「……え」

「俺のことは、生前の勇士とは別人と思ってもらったほうがいい」

かつての名を呼ぶ者など、今まで一人もいなかった。父なる大神の別名であるヴィズルの名を冠する勇士としてのみ扱われていたからだ。かつての名もなき勇士のことを正しく記憶している者などいないと思っていた。

「かつての俺の事をオルトリンデが覚えていてくれるのならば、それはいい餞となるだろう」

「……それは、違います。あなたを弔うために、わたしはあなたを覚えていたわけではありません。わたしは、そのために、あの洞窟を保存していたのではないのです。いつか、こうして再会するだろうと思つて……」

オルトリンデは、秘めた思いを押し殺したような表情で唇を震わせる。

「わたしは……決して……」

オルトリンデの白い手が弱弱しくヴィズルの胸に触れる。

「でも、あなたはあなた、です。大神があなたの魂を作り変えていたとしても……あなたにかつての实感がなかったとしても、■■■■がヴィズルとなったとしても、過去が変わるわけではないです。それに、たとえ……ヴィズルがわたしの事を覚えていなくても、これからはこれからだとスカディ様は仰っていました。その通りだと思いません」

ヴィズルの鼓動をオルトリンデは手の平の上で感じている。

ここに確かに■■■■——ヴィズルがいる。

この熱も魔力も鼓動も、三千年前のままだ。魂が造り替えられたと言っていたが、だからどうしたというのか。その程度で、三千年の間に降り積もった想いが溶けて消えるはずがなかった。

何より、オルトリンデは純粋なワルキューレだ。

自分が見つけだし、ヴァルハラに導いた魂が偉大な勇士となった事は誇らしいことであった。

「会いたかったです、ヴィズル。炎が世界から消えたあの日からずっと」

オルトリンデが、甘えるようにヴィズルの胸に顔を埋める。

「抱いてください。昔みたいに」

三千年前、オーデインに代わり炎の巨人に単身で挑んでいったヴィズルの背中を覚えている。あの時、世界と共に燃え落ちて何もかもが消えてなくなるはずだった。それを防いだのは、ヴィズルがその身を盾としてスルトを押し留めたからだ。

大神オーデインの逆転の一手が発動するまでの短時間ながらも永遠とも思える時間を、恒星の如き火炎の中で燃やされ、焼かれ、砕かれながら耐え抜いた彼は、オルトリンデの命の恩人でもあるのだ。

半ば強引にオルトリンデは、ヴィズルに迫った。

胸の奥から湧き起こる、強い炎のような思いに突き動かされていた。

「はむ、ん、ちゅ……れる、れる……じゅる……れる、ちゅろ……ちゅぶ、れる、れるお」

オルトリンデは、ヴィズルのペニスを一心不乱にしゃぶった。

オルトリンデの要望を受け入れたヴィズルは、彼女の思うに任せることにしたのだ。

ベッドの上で座るヴィズルの股間に顔を埋めて、ペニスを啜えるオルトリンデ。ゆっくりとした頭の上下運動と細やかな舌使いの併用は、ラグズのたどたどしいフェラとはまったく異なる熟練の技術だった。

「じゅく、じゅく、んじゅる……くぶ、じゅる、ん……ん……ちゅぶ、れる、んく……ちゅぶ……ん、はあ、あ……大きくなりました」

オルトリンデの口から出たペニスは啜えられる前とは比較にならない大きさに肥大化していた。あつという間に勃起させられてしまったのだ。

オルトリンデは情欲に目を潤ませて、陰茎に舌を這わせる。亀頭を啜えて、もごもごと唇で刺激を啜えながら手淫をする。

ぬるりと敏感な場所を舐められると、ペニスがぞくぞくと震えてしまう。熱くざらつく舌がまるで蛇のように絡みついてくる。

「んぶ、じゅる、れる……れる……れおお♡ んふう、れる、れる……れるお、ちゅぶ……ん、じゅる、はあ、はあ、れろれろ……ん、ちゅう」  
オルトリンデは、ヴィズルの様子を上目遣いで確認しながら、重点的に鈴口の辺りを責めてくる。

カウパー液が滲み出てくるが、それを全部舐めてしまう。

そうしていたかと思えば、急にペニスの根元にキスをしたり、しゃぶりついたりする。そこから、舌で先端までゆっくりと舐め上げてから、口内にペニスを含み、喉奥まで飲み込んでいく。

そんな風にオルトリンデは、ペニス全体を満遍なく愛撫する。

「ちゅば、ちゅば、れる……じゅる……ふう、あ……はあ、ヴィズルのこは、昔と変わってないですよ」

「三千年も前のこと、よく覚えてるんだな」

「もちろんです。■■■■の———ヴィズルのことです。ちゅ、はむ、れる……ずっと、覚えてました。ん、じゅる、じゅる……じゅる、ちゅる、れる……んむう、ふう、れる……あふ、ん、じゅるる♡」

本当に愛おしそうにオルトリンデはフェラを続ける。

フェラをしていてフードが邪魔になったのか、啞えたままでフードを脱いだ。黒髪の上で一對の羽が踊っている。

「ん、ん、ん、ん、じゅる……はふ、ん、じゅる、じゅる、れるれる、ちゅ……ちゅぶ、れる、んふう、ふあ、あ、れるお、はむ、ん、じゅる……」

「ん、そろそろ」

「はい、じゅる……ん、いつでもいいです。ん、じゅる、れる、れる、じゅるる」

オルトリンデは射精欲の高まったペニスを頬張ったまま逃がさない。さらに強く吸引して、カウパー液を啜りだす。

激しい責めに堪らずヴィズルは射精させられてしまった。

「んく……ん、んく……！」

オルトリンデは、口内で暴れるペニスを押さえ込んで、吐き出される精液を飲んでいく。

「ん、じゅる……んちゅる、じゅる……れるう、じゅる、ちゅぶ——  
—ん、う♡」

尿道に残っていた精液もすべて吸いだされた。

ちゅぶ、と音を立ててオルトリンデの口から出たペニスには精液は一滴たりとも付着していなかった。ペニスを彩るのは、オルトリンデの液だけだ。

「ん、ふう……あ……すごい、魔力」

うつとりとした表情を浮かべるオルトリンデは、何度も生唾を飲みながら、いそいそと服を脱ぎだした。

「まだ、全然できますよね？」

「見ての通り」

「ん……♡」

オルトリンデの手の中で、射精直後のヴィズルのペニスはあつという間に復活していた。

「わたしも、もう結合したいです」

「分かった」

オルトリンデの気持ちはありがたい。北欧の勇士として、ワルキューレにここまで慕われるのは名誉なことだ。前身となった勇士と今の自分との間にどれだけの違いがあるのか分からないが、そんな些細なことは気にしても仕方がないのだと割り切った。

ここにヴィズルとして存在するのも、オルトリンデが見つ付けてくれたからだ。そういう意味では、彼女は自分の起源となった存在なのだ。慈しむことに違和感はなかった。

「は、う♡」

オルトリンデは、ヴィズルの腰に跨った。そそり立つペニスの先端を自分の陰部に押し当てて、それだけで軽く悶えた。

「挿入、します。う、ん……い！」

ずっぷりとオルトリンデの膣内にペニスが飲み込まれる。

「ふう、うう！ ん——はあ、生殖器の挿入を確認、しました。はあ、う、ん……」

オルトリンデの小柄な身体そのままに膣内は狭く、キツイ。しかし、媚肉は柔らかく、愛液に溢れていて挿入そのものは容易かった。奥深くまで飲み込んでから、ペニスをしつかりと締め付けてくるのだ。これは、堪らない。

「動きます」

と、一言言った後で、オルトリンデは腰を上下に振り始めた。

ぬるぬるとした膣肉と肉褻が忙しくなくペニスに絡みつき、締め上げている。ヴィズルも負けていない。オルトリンデの動きに合わせて腰を上げ、膣奥を突く。

「ん、ふう、あ……はあ……うあ、ん、ふう……あ……あ……ん♡  
あ、あ、はう、う、ん♡」

気持ち良さそうにオルトリンデは喘いだ。

激しく腰を振り、肉と肉がぶつかるといやらしく音が響く。じゅぶじゅぶと愛液が掻き出されて、快楽に呻くワルキューレは、嬉しそうに表情を綻ばせる。

「ああ、んあ、はあ、ふあ、あ、あ、あん♡ あ、う、ん♡ふう……はあ、う、ん、ヴィズルの生殖器、ん、久しぶり、です。ん、はあ、あ、

あん、あん、ふうあ♡」

久しぶり、とオルトリンデは言う。

その言葉は実のところかなり重い。

何せ三千年だ。

普通の人間が経験できる年数ではない。まっとうな人間ならば、どれほど延命しても五百年がやっとだ。それ以上は、魂が腐り落ちて魔物に等しい怪物になってしまっただろう。

半神に等しく、機械に近いワルキューレだからこそ想い続けられた年月だ。

「んあ、んあ、んああ……ん、ふう、はあ、ヴィズルが、ヴィズルがわたしの臍内に♡ はあ、ん、あはあ、あ、んあ、あ、あ、ふう、ん、ん♡ ああ、はあ、はあ、ふぐう、んあ、あ！」

嬉しそうにオルトリンデは、悦びを露にしている。こうまで感情的な彼女をヴィズルは知らない。前身となる勇士の記憶を参照しても、彼女はもう少し機械的だった。そう、出会った頃のラグズに近い感じだったのだ。こんなにも感情豊かなオルトリンデは新鮮だった。

オルトリンデの柔らかい尻肉を両手で掴んで、しっかりと奥深くまで突き上げる。彼女の体重も乗って、子宮口までがつつりと貫いてやる。

「んんんん♡ あふッ、あ、んあああ！ あ、ああ、奥う、届いてます……んへあ、あ、んああ……あ、あふ、んあ、ああ、ああ、あああ♡」

だらしなく舌を出して、喉を反らせるオルトリンデ。しっかりと快楽を噛み締めるように表情を蕩かしている。

比較的大人しい性格のオルトリンデが、こうも乱れるというのは男の情欲を誘う。

「んあ、はう、んあ、ふう、ふう、んん、あああ、ん、ん、んん、くう、ふあ……ああ、ん、ふう、あふ、ん、ふぐう、ん」

じゅぷじゅぷと激しく音を立てて結合部が泡立つほどの抽送を続ける。

オルトリンデは額に汗を滲ませながら、言葉もなく嬌声を上げ続け

る。

「ふう、ふう、ふう、ふう、んあ、ああ、ああ、ああ、んあ、あ、ふ——ぐ、ん、あ、あ、んあ、んあ、ああ、ん、ふうッ、ぐ……んい、あ、あ、う」

オルトリンデの声から余裕が失われていく。

喘ぎ声の感覚が短くなり、自然と腰を振る激しさも増した。彼女の膣内の締め付けも一段と強くなっている。

間違はなく、昇り詰めようとしているのだ。

「あふ、んふう、んあ、あ、ああ、い、イクツ、んあ、う、い、ヴィズル、んん、わたし、ごめんさい。わたし、ん、もう、ダメ、かもしれません、ん、んん♡」

「ああ、いいぞ。俺も、そろそろだ」

「う、んん、そうなんですか？ んあ、あ、じゃあ、一緒に、ん、一緒にいいです」

そう言いながら、ヴィズルの射精を促すオルトリンデ。そこまで言われれば、我慢をする必要もない。

「なら、イクぞ、オルトリンデ」

「はい、ん、どうぞ。う、う、膣内に………！」

射精の予感に膣内の媚肉が震えたった。

ガンガンと激しく突き込まれるペニスは、互いの余裕をすっかり奪っている。動けば動くほど気持ちよくなってしまおうのは共通しているのだから当然だろう。

ヴィズルは、オルトリンデの腰を掴んで引き寄せて、同時に腰を跳ね上げる。しっかりと奥深くまで貫いて、射精する。

「んああああああああああああああああああ♡」

膣奥で射精を受け止めるオルトリンデは、同時に激しい絶頂に見舞われた。

「ふあ♡ んあ♡ んああ♡ ふう、あ、あ、気持ちいい、です。あ、う………これ、う、あう………」

久しぶりのオーガズムで疲れ果てたのか、オルトリンデはぐったりとヴィズルに身体を預けた。

「大丈夫か？」

「はい、ん、あ、ヴィズルの魔力が、身体に染み込んでくるみたいで……あ、余韻が、すごいです。はあ、う、もうしばらく、このままでいさせてください」

オルトリンデの膣内にペニスは挿入されたままだ。結合を解きたくないオルトリンデは、繋がったままヴィズルの唇を奪う。

オーガズムの余韻を愉しみながら、オルトリンデは三千年ぶりの口付けに耽った。

「うー……オルトリンデばっかお楽しみすぎ、ずるい」

そう呻くのは桃色の明るい髪をした統率個体のワルキューレ、ヒルドであった。

三千年という長い時間を、勇士を触れ合うことなく過ごしてきたのはヒルドも同じだ。ヴィズルとその前身となる勇士とは挨拶程度の仲ではあったが、オルトリンデが気にかけていたし、当然、ヒルドも気にかけていた。——ワルキューレは、記憶も経験も定期的に共有する。性格の違いがあるように見えて、思考回路は共通規格だ。オルトリンデが好ましく思うということは、ヒルドも同様に好ましく思うということでもある。

そして、今回はうつつかりオルトリンデと同期してしまった。オルトリンデの感情とも言うべきバグ、エラーの爆発をヒルドは受信した。——してしまった。

「身体熱い……」

オルトリンデは、ヴィズルとの結合で満足したかもしれないが、ヒルドは外部からその感覚が流れ込んでくるだけだ。直接的な接触がないので物足りなくなってしまう。

「久しぶりすぎて調整間違っちゃったな。うーん、これどうしようかなー」

困った事に勇士は世界にヴィズル一人だけだ。

物事を深く考えていないように見えるヒルドにもワルキューレの矜持はある。どこぞの人間と関係を持つわけにはいかないのだ。



「ま、しょうがないか。後でわたしもヴィズルにしてみらおうつと」

ヒルド的にまっとうな結論を導いた。オルトリンデもヒルドも共通規格のワルキューレだ。少しばかりオルトリンデの思考回路はわき道に逸れつつあるみたいだが、同位体だ。混ぜてもらってもいいだろうと軽く考えた。思考回路が共通で、経験も記憶も共有するのに、それを出力する肉体が別物だから、こういうことも起こり得る。これは、ただそれだけのことなのだ。

ヒルドは、にこやかに城の廊下を歩き出した。

向かう先は、もちろんヴィズルの部屋である。

## 4話

ヴィズルとは、古き言葉で滅ぼす者を意味し、本来はオーデインを表すケニングの一つだ。自らが生み出した最後の勇士に与える名としてはこの上ないものだ。そんな名を与えられたヴィズルには、滅ぼすという宿命が刻まれるにも等しいのだから。

しかし、この世界は止まっている。何もかもが停止した世界で、滅ぼすも何も無い。人も巨人も知恵を失い、繁栄は過去のものとなった。餓えはあろうが、富を求める概念すらも失ったのか、更なる発展を望まない世界では争いは最低限のものとなる。

勇士が必要とされるような戦場は、この世界に現出することはないのだ。

激烈な戦いに臨むために存在していたヴァルハラ勇士の一人であるヴィズルにとっては、少々居心地が悪いというはある。戦いを至高のものとして、戦いで死に、ヴァルハラに行く事を第一義としていた北欧の勇士たるヴィズルは、戦いのないこの世界になかなか意義を見出せないでいる。

ヴィズルは休眠状態から意識を覚醒させた。

本来、サーヴァントに睡眠は必要ない。霊体であるサーヴァントは、魔力さえあれば存在できるし、睡眠不足だからといって身体の活動にも支障を来すことはないのだ。

しかし、眠りが無意味ということもない。精神活動を行う過程で生じた様々なストレスを解消するには都合がいい。身体的な疲労と精神的な疲労は別なのだ。何より、暇つぶしにはちょうどよい。やることがなければ、眠っているのも時間の使い方としては有用だ。

何せ、もう人間ではないのだ。無限の時間をこの止まった世界で過ごすとなれば、睡眠もいい時間つぶしになる。

目覚めて最初に見たものは、真っ赤な瞳だった。ワルキューレ特有の真紅の輝き。ヴィズルもオーデインに手を加えられたことで、同じ瞳を持っている。それが、すぐそこにあった。

「おはよう、ヴィズル。よく眠れた？」

やたら明るく話しかけられて、少しばかり困惑する。

顔立ちはオルトリンデによく似ているが、まったくの別人だ。桃色に近い明るい髪色と人好きのする表情が魅力的なワルキューレの一騎である。

「確か、ヒルド……だったかな」

「ピンポーン、大正解。よく覚えてたね、三千年も前のこと」

「俺にとっては昨日も同然だからな」

「あ、そっか。そうだったね」

■■■■とヒルドは三千年前にも交友があつた。といつても、彼女とは少し話ただけで、そこまで密接な関わりはなかったが。

スルトの猛火から生き残ったワルキューレは三騎だけ。オルトリンデの他に、このヒルドとスルーズがいるとは聞いていた。

「むしろ、三千年も前のことをよく覚えていたねつてのは、ヒルドにこそ当てはまるんじゃないか？」

「ワルキューレは、人とは違うからね。そうそう簡単に忘れてたりはしないよ」

ベッドの上で頬杖をついたヒルドは、愛らしく首を傾げてみせる。

「ところで、オルトリンデは？」

「オルトリンデなら、今は外。人の集落の見回りに出ているよ。統率個体は三騎しかいないからね」

なるほど、道理ではある。

たった三騎で北欧世界の人々を見守るのだから、日々あれこれと飛び回っているのだろう。量産型ワルキューレも百余騎いるとはいえ、不慮の事態に対応できるほどの柔軟性は彼女たちにはない。

もっとも、そういった不測の事態は滅多にに起きる事はないという。すべては女神の手の平の上なのだから。

「それで、ヒルドは朝からここで何してるんだ？ 人の部屋に勝手に入って、ルーンまで使ってるってのは」

ヒルドが操る魔術は北欧の古きルーン魔術。原初のルーンだ。大神オーデインの流れを汲む魔術の秘奥であり、ヒルドのそれは大神の直伝だ。

それは攻撃のみならず、様々な面で活躍する万能性を秘めている。今、彼女を覆う結界は、ヒルドの存在感を限りなく希釈している。サーヴァントのスキルにしてAランク相当の気配遮断に匹敵するか。「だって、ヴィズルを起こしちゃうかなって」

「そもそも、勝手に入ってくるのは如何なものかと思うがね」

仮にヒルドがヴィズルを害する目的で寝込みを襲ったとしても、対応は不可能ではない。ヴィズルもまた、原初のルーンに通ずる戦士なのだ。常在戦場の北欧勇士であるのなら、暗殺対策くらいは当然に打っている。

「ねえねえ、ヴィズルはさ、体力には自信ある？」

「そりゃあ、もとはヴァルハラ勇士の一人だ」

「じゃあ、さ……朝からでも、いいよね？ オルトリンデとは、昨日、お愉しみだったみたいだけど、一晩経てば、もう大丈夫でしょ？」

さも当然のようにヒルドは言う。

貞操観念とかそういうものは、彼女たちにはないのか。そもそも、勇士の相手をするのが機能の一部として組み込まれているのだ。

「それとも、自信ない？ 一晩くらいじゃ、回復しないかな？」

「そういうことを男に言っていると、酷い目に遭うぞ」

「ふふ、望むところだよ。三千年ぶりに、勇士様にご奉仕させて」

ヒルドの安い挑発にあっさりに乗ったヴィズル。

男としての矜持を刺激されたのだから仕方ない。また、こんな美少女に迫られて、応じない男は軟弱者の謗りは免れないのだ。

「……ちゅ」

と、身体を寄せてきたヒルドと口付けを交わす。

「ふ、む、ちゅ……ん、ちゅ……ん……ふ、う、ん……ちゅ……」

ヒルドがヴィズルの唇を啜るようにキスをする。

「はあ、ん、ちゅ……んちゅ……はあ、ふう、ん、ふう……ちゅ……ちゅ……ん、ん」

まるで慈しむようなキスを繰り返してから、ヒルドは舌先でヴィズルの唇をチロチロとなぞった。挑発的な舌使いに釣られて、ヴィズルも舌でヒルドの舌を追う。

「ん、ふ、う、ん、れる……れる……んちゅう、れる……えへへ、キス上手、ちゅ……んんツ……れるれる……んふう♡」

ヒルドは、笑みを浮かべながらキスを続ける。舌を絡み合わせ、だ液を交換した。ヒルドの両腕がヴィズルの首にしつかりと回ついで、体重を固定している。

時に唇を離して呼吸を整えて、それからまた深くキスをする。

ヒルドの舌がヴィズルの口内に入り込んできて、音を立てながら口内粘膜を舐め回してくる。

ちゅくちゅくと淫らな音が室内に響き渡る。

熱いヒルドの舌が上顎をなぞり、歯茎を行き来し、舌の裏側を舐めてくる。口付けだけで、腰砕けになりそうだった。

「れおお、れる……ちゅ、れちゅ……んんう、ちゅ……ふう、はあ、れる……れる……ちゅ……♡」

ぎゅつと唇を押し付けてくるヒルド。やがて、満足したのか唇を離れた頃には、ヴィズルのペニスはすっかり臨戦態勢になっていた。

「あはは、すっごい。もう、すっかりヤル気だね」

「ぬう」

悔しいがこれが現実だ。ヒルドの言うとおり、ヴィズルはあっさりと昂ぶらされてしまった。ヒルドは、ヴィズルの首筋にキスをしながら、ヴィズルのペニスを手で扱く。

「ちゅぷ、ちゅぷ、ん……熱い。おちんちんって、こんなだったっけ……ん、固いし、すごい」

手の中でガチガチに固まったペニスの感触を確かめながら、ヒルドは呟いている。

実に三千年ぶりに触れた勇士のペニスに、ヒルドも興奮を隠せない。

「はあ、はあ……」

ヒルドはペニスを見つめながら、手淫を繰り返す。すぐに、カウパー液が滲み出てきた。とろとろの液が垂れて、ヒルドの手を汚す。

「あー、ちよつと出てきちゃったね、これ……そうそう、こんなのが出るんだった」

そう言つて自分の手を汚した液体を楽しそうに玩ぶ。

「臭いもキツイなあ。でも、懐かしい。ペろ……ふふ、苦い」

指に付着したカウパー液の臭いを嗅ぎ、それから舌で舐める。ずっと昔のことを思い返すように、ヒルドはカウパー液を味わった。

「ヴィズルは、一回じゃ終わらないよね？」

「もちろんだ。お望みと有らば何度でも付き合つてやるよ」

「あはは、大きく出たね！　じゃあ、最初の一発は無駄うちしても別にいいよね？」

そんな事を言いながら、ヒルドは身体をベッドに横たえる。頭をヴィズルの足の方に向けて、ペニスを真横から見つめる姿勢を取つた。

「近くで見ると、やっぱり大きいな。それに、この臭い……ドキドキする」

ヒルドは、頬を染めてヴィズルのペニスの臭いを嗅いだ。

久しぶりの雄臭で、ヒルドの身体もすっかり昂ぶっている。そもそも、昨夜のオルトリンデの情事と同期したことで、ヒルドは発情済みなのだ。

ヒルドは我慢できないとばかりに、舌をペニスに這わせる。

「れろん……れる……れる……んふ、ちゅ、れる、ちゅ、れろれろ……んあー、んふう……んちゅぶ、れる、んちゅ、ちゅぶ……れろお♡ちゅぶ、ちゅぶ、ん……ちゅう」

ヒルドは、亀頭を舌で舐り、その後ペニスを大口を開けて啜え込んだ。

もごもごと口内で舌を動かしてペニスを舐め回し、滲み出るカウパー液を片っ端から吸い取っていく。

「じゅるるる、じゅるる、んじゅるう……んふう、んふうー、じゅる、ちゅぶ、れるれる、んんん♡　んふ、れろお、じゅるる、れろれろ、じゅる、ちゅぶ、くぶくぶ、じゅるる♡」

ヒルドの口淫は、激しさを増していく。

うっとりとしながら、味わうようにペニスを堪能している。

言葉もなく、ヒルドは黙々とペニスをしゃぶり続ける。

「ふうふう、ん、ちゅ、れちゅ……じゅるる！……ふん、はあ、ああ、ん、じゅるる、んむん、んんー……れるれる、んぐう、ん、じゅる……れるお、じゅぶじゅぶ、んく、はあ、んはあ、ああ、れるお、れるお、じゅる、ちゅぶ、んはあ、あ、う、じゅるるる♡」

ヒルドは太ももをすり合わせ、もじもじとしながらフェラをしている。体温の上昇と性欲の肥大化は、もう留まるところを知らない。

しゃぶりながら心音がバクバクと昂ぶっているのをヒルドは自覚していた。

「んん、ん、ふう、れるれる……はああ、大きい、おちんちん……れるれる、じゅる、ちゅっ……ん、美味しいよお、れるお、じゅるる、んふう、ん、ちゅふう♡ はあ、はあ、れるお、じゅるる、れるれるお♡」

無我夢中でペニスをしゃぶるヒルドのおかげで、ヴィズルのペニスはすっかり液まみれだ。ヒルドの液が根元まで塗布されていて、テラテラと鈍く光っている。

ヒルドは、そんなペニスへの奉仕をやめない。伸ばした舌先で、亀頭のエラを舐め、皮を舐め、棹を舐める。カウパー液の雫を尿道から吸い出して、細い指先で玉袋を愛撫する。

フェラに夢中になっているヒルドの股から愛液の雫が滴る。それを見て取ったヴィズルは、自分ばかりがされているのも悪いとヒルドの股に指を伸ばす。

「ふ、あっ!？」

ビクン、とヒルドが身体を震わせた。彼女の秘所はすっかり濡れていて、いつでも男を受け入れられるような状態だった。

「舐めながら感じてたのか？」

「う、あ……どうかな、ん、ふうう♡ あ、ダメだよ、そんな、あ♡」  
いともあつさりヒルドは高みに昇ってしまう。

ヴィズルの指がクリトリスを見つけ出して優しく愛撫してくる。腰がガクガクとなって膝に力が入らなくなる。無性に膣内に刺激が欲しくなって、ヒルドは呻いた。

「あ、ううう……ふうう、あ……ん、ちゅッ……れる、ん、おかえし、

んん、れる……ふう♡ んあ、ふう、じゆる、れる、ちゅぷ、んん、あ！ ん、やあ♡ んふう、あ、うう、れる、じゆる、んんう♡」

股座をもじもじとしながらヒルドは懸命に奉仕を続ける。

ヴィズルはそんな健気なワルキューレの陰部の奥に指を押し込んだ。膣肉のぬめりと温かさは、人のそれと変わらない。

「ふああ、あ、あ、ああ……そんな、ダメえ。ヴィズル、ん、そこ、弱いよ……ん、意地悪しちや、あ、んあ、あふう、んんツ。い、イツちやう」

「ヒルド、こつちもだ」

「ん、んん♡ んん、ふう、んぐうう！」

ヒルドは射精の気配を感じて、口内にペニスを迎え入れる。

その直後、膣肉がぎゅつと引き締まると同時にヒルドがぐもつた嬌声を上げた。びくびくとペニスが脈打って、白濁液をヒルドの口内に注いでいく。

「ぶぐ、ん、んく……ん、じゆる、じゆる……んんうう♡」

吐き出される精液を、ヒルドは懸命に飲み干していく。

「ちゅぱ、ん、んんう……はああ♡ 勇士の精液、ん、美味しいれるれる……ちゅ♡」

声を熱く蕩かせて、ヒルドは尿道に残った精液まで吸い出す。

「ヴィズル。ねえねえ、あたしさ、もう我慢できないよ」

「分かってる。そんなにお望みなら、応えるまでだ」

「あはっ。やったあ」

頬を上気させて、ヒルドはヴィズルに跨る。精飲してさらに身体が火照ってしまっていた。ヴィズルの魔力を取り込んで、もつと欲しいと身体を訴えているのだ。

ヴィズルのペニスはすでに二回戦に備えて勃起している。

ヒルドは龟头を自分の膣口に宛がう。今か今かと待ち侘びていた結合。ゆつくりと、腰を下ろして、奥深くまで繋がる。

「んん……♡ あ、はあ♡ 奥まで、挿入しちやったね♡」

ヒルドの膣内に入り込んだペニスは、全方向からの柔らかくぬめる膣肉に圧迫されて、さつそく快感に咽び泣きそうになった。



ヒルドは、すぐに腰を上下に動かし始め、じゅぶじゅぶと愛液を滴らせる。

「ふう、ふう、んふう♡ はあ、あ、あ、ん、ん、ん、ふう、はあッ。う……あ、う、んん♡ はあ、うあ、う、う、ん、ふう、はあ、はあ、ふあ!?!」

上体を起こしたヴィズルはヒルドの華奢な身体を抱き寄せて、自分からも腰を突き上げる。

ヒルドのいい香りが鼻を満たし、さらに興奮の度合いを増している。

「ん、ふう、はあ……あ、ん、ん、イイツ。ん、ふう、ヴィズル、イイ、気持ちイイよ……ふう、もつと、突いてえ」

ヒルドは、ヴィズルに抱きついて、腰を動かしていく。時に上下運動ではなく奥深くに押し付けてぐりぐりと円運動したり、キスを求めてきたりと快楽に積極的だ。

「ちゅ、ちゅ、ちゅ、ん……はあ、あ、深い、ん、んんッ。あ、ふう、う、あ、うん、ふう、はあ、はあ、あああう」

蕩けそうな声を上げて、快感に身を委ねるヒルド。

「余裕がないんじゃないのか、ヒルド。自分から、ヤリに来たくせに」  
「ん、そんなことないよ。まだまだ、ん、ん、いう、ふう、ふう、んお♡  
ん、くうう……はあ、うう、そんな事、言ってるうちに、ん、う、ど  
んどん射精させるからね!」

ヒルドはヴィズルの首に手を回して抱きついて、激しく腰を上下運動させる。パンパンと肉を打ち合う音が響き、ヒルドの嬌声も一段と大きなものとなる。

「ん、ん、ん、ん、はあ、れちゅ♡ ん、ちゅ、ちゅぶ、れろお、はあ、はあ、んん、ふう、はあ、んん♡」

キスをしながらヒルドの腰は跳ね上がる。うねうねと蠢く肉襞が、ヴィズルのペニスに絡みついて抜き上げる。単調な動きに見えて、ヒルドが動く度に射精欲が刺激されているのは事実だった。

そんなヒルドの腰をヴィズルは掴んだ。そして、そのまま力強く膣奥を突く。

「ふ、むッ!？」

ヒルドが目を見開いた。

構わず、ヴィズルは激しく子宮口付近を突き上げる。

「んはッ!? あ、ん、ふうあ、はあ、んあ、んあ、ああ——んあ、ふう、ん、んん、急にそんなつんあ、ふあ、んんんッ。やあ、激し、んん、反則ッ!」

「反則なものか。ヒルドのおかげで気持ちよくなってるからな。そのお礼だよ」

「口ばかりッ。ん、そんなわけないじゃん。こんな、んん、ふう、ああッ。ダメだってばあ」

「ダメなのか？ 気持ちイイのは好きじゃないのか？」

「それは、んん——!」

答えを聞く前にヴィズルからヒルドに口付けをする。ヒルドが答えることができないように深く舌を押し込んで、ヒルドの舌を押しえつける。

「ふむう——! んん、ん、ふん、んんう……ちゅ、ぷ、れちゅ、んあッ、ふ、んむう……ん……んふうう♡」

ヒルドは目を虚ろにして、口付けを受け入れる。自分から舌を絡ませてディープキスに応じながら、腰をぐりぐりと捻ってくる。

「ちゅぷ、んあ、あ——♡ ん、ふうあ、あ、ふ、んん……んあ、あああ!」

だらしなく顔を歪ませて快楽に喘ぐヒルド。

「き、気持ちイイよお♡ ヴィズルのおちんちん、んんふう♡ もうダメえ、こんな久しぶり過ぎて、ふぐう♡ こんな、はずじゃあ♡」

頭を振って、気持ちを落ち着かせようとするヒルドだったが、ヴィズルがそれを許さない。ガンガンと突かれて、ヒルドの表情に余裕はなくなっていた。

「ふひいい♡ んあ、ア、あ、あ、あ、あ、あ、ああ! んあ、ふうあ、ああ、い、イクッ。また、イクよお、んあ、んお、お、ふおお♡」

ぎゅつとヒルドが身体を痙攣させる。

膣内が締まって、ペニスを締め上げてくる。何度目かになる絶頂だ。そこを、さらにヴィズルが責める。ズンと突き上げると、ヒルドの嬌声は悲鳴にも似たものとなる。

「ひあああああああああああ！ まだ、イッてる、のにい♡」  
目の前がチカチカとする。声を我慢することもできず、なすがままになってしまう。

「ふああ、うあ、んあ、んああ、い、イクの、止まんない！ こんな初めて……ヤバイ、んあ、すごいい♡」

「ヒルド、さつきからイキ過ぎじゃないか？ こんなに締め付けてきて」

「ご、ごめんなさい……だって、ヴィズルが、気持ちイイから。ん、ひうう。また、来るう」

「もう一度聞けど、気持ちイイのは好き？」

「んん、ふうあ、す、好きだよ！ 好きッ！ もつと、もつとイキたいッ！ ん、もつと突いて！ んん、もつと、イカせてえ！」

激しく腰を振りながら、ヒルドは叫ぶように懇願する。

三千年ぶりのセックスがよほど彼女の琴線に触れたらしい。

すっかり瞳を淫蕩に染めて、よがり狂っている。

「じゃあ、満足するまで付き合っつてやる。どうせ、することもないからな」

「うん、うん、お願いします。んひい♡ ふあ、んお、ふぐう、んああああー！♡ はあ、んひ、ひぎい、んあ、んああ、奥、奥がイイのっ。もつと奥、奥ぐりぐりして♡」

ヒルドが腰をくねらせる。

彼女の要望どおり、膣奥を責め立てる。ポルチオが相当気に入ったらしい。徹底的にそこを苛め抜く。

「あ、あ、それッ。それがイイッ。んあ、イクイクイク、んんん！ ふひ、ひあ、あ、あ……気持ちイイ、頭変になる、んあ、ふひい♡」

絶頂するたびにギチギチとまるでペニスを食い千切ろうとしているのではないかというほど強く締め付けてくる膣肉。

柔らかいのに強く、愛液でぬめりながらペニスを満遍なく愛撫して



対面座位のまま何時間も交わり続けている。

そんな折、唐突に部屋の扉が開いた。鍵が掛かっていたいなかったのである。入ってきたのはオルトリンデであった。

オルトリンデは、ヴィズルと繋がったヒルドを見て固まった。

「ヒルド……?」

「あれ、オルトリンデ? 見回り、終わった?」

「あ……はい……どうして……」

「ん? オルトリンデが昨日、ヴィズルとしてたから、あたしもしたくなつて思つて、んあ♡ ん、ふえあ……あん♡ ヴィズルつて、すごいんだね。はあ、ん、おなか、いっぱいだよ♡」

振り返るヒルドの表情は、そうと分かるくらいにすっかり墮ち切っていた。

とても気持ちよさそうにしている。今でも繋がったままで、オルトリンデの来室にも動じていない。もとより、ワルキューレは同じものだ。根幹で繋がっているので、姉妹と言いつつ自分の分身のようなものなのだろう。その感覚はヴィズルには分からない、ワルキューレ特有のものだった。

ヒルドは、事ここに至るまでずっとオルトリンデとの同期をしていなかった。オルトリンデはヒルドの行動にまったく気付かなかつたのだ。部屋に入ってきて、初めてヴィズルとヒルドが交わっている光景を目の当たりにしてしまった。心の準備ができていなかったで、途方もない衝撃を受けた。

「あ……う、ええと」

「ふふ、オルトリンデもこっち来る?」

「え?」

「おい」

ヒルドはなんてことないかのようにオルトリンデを誘う。

「ヴィズルはまだまだ元気だし、オルトリンデも一緒にしようよ。この後、暇でしょ?」

頭が真っ白になったオルトリンデに、ヒルドが嫣然と微笑んで誘いをかける。

オルトリンデは、生唾を飲んだ。

ヒルドとヴィズルの結合部が丸見えだった。自分も、ヒルドのような顔をしてヴィズルに抱かれていたのだろうかと思ってしまう。

きつと、そうだったのだろうか。自覚はなかったが、こうしてヒルドの姿を見てしまうと分かる。

ヒルドのことがすごく羨ましかった。そして、同時に悔しいという思いも芽生えた。胸中に発生する、染みのような感情の小波は、オルトリンデの起伏の少ない表情にも少なからず変化をもたらした。

「わたしも、一緒にいいんですか？」

「いいよいいよ、一緒に気持ちよくなるろう」

にへらと笑うヒルドに、オルトリンデは同意した。

根幹を同じくする以上、思考回路は同じだ。言葉を交わすでもなく、自然と同じ結論に行き着く。頬を上気させたオルトリンデは、ヴィズルを見つめて近付いてくる。

ヒルドは、それでも結合を解こうとせず、まだまだ搾り取るつもりでいるようだった。

## 5話

「特に問題はないな」

とスカデイは言った。

目の前にいる小柄な少女——量産個体のラグズに対してである。

裸になったラグズは、二度に渡るヴィズルとの交わりによって生じた不具合をスカデイに報告に来たのである。ワルキューレの使命は勇士の魂をヴァルハラに運び、ラグナロクを迎えるまで勇士の接待をすることだ。

ラグナロクを言葉でしか知らない量産型ワルキューレであっても、その基本機能は継承している。

この北欧に於いて唯一の勇士であるヴィズルの性欲を受け止める器として、身体を使うことは至極当然のことと思えたが、その際ラグズを襲ったのは、自分でも制御できない肉欲であった。それを、ラグズは肉体の不具合と捉えた。

「問題ない？　しかし、この身体は勇士様との性交の際に妙な昂ぶりを起こしております。詳細は不明ですが、これまでの任務では生じなかつた不具合です」

「それは不具合ではないのだ。もともとある機能故、気にするな。むしろわたしは喜ばしいぞ」

なぜ、この機能不全が喜ばしいのかラグズには分からなかつた。

ラグズという個体名を与えられたとはいえ、彼女は数ある量産型のうちの一騎に過ぎない。他の量産型と同じ機能を備え、同じように形作られたにも関わらず、他と異なる機能を発露するのであれば、それは不具合も同然ではないのか。

しかし、スカデイはこの不具合を修正することはなく、むしろ好意的に捉えてすらいた。

ラグズは、主にそのように判断されたので、理解はできないものの、そういうものだと受け入れた。粛々と主に従うのがワルキューレの性質である。

とりわけ量産型ワルキューレは、神や人のように思考しない。与えられた任務を忠実にこなすだけの道具である。

「どれ、上手い具合に刻まれただろう」

そんなラグズに歩み寄ったスカディは、彼女の下腹部を撫でた。

ラグズの鼠径部には薄らと文様が浮かんでいる。ラグズはこれをルーン魔術を応用した契約魔術の一種であると見た。

「名付けて愛のルーンと言ったところかな」

「愛のルーン？ このような形状のルーンに覚えはありませんが」

「それはそうだろう。わたしのオリジナルだからな」

さらっとそう言うてのけるスカディ。

三千年もの間、玉座にあり続けた神だ。既存の原初のルーンを基にして、新たな魔術を考案していても不思議ではない。

「このルーンの効果は？」

「それは、その身で体験してみるのが一番だろう。一応、問題はないはずだ。プロトタイプの不都合も克服済みだからな」

スカディは、自分の編み上げた新しい魔術のできばえに感心するよ  
うに何度も頷いてみせる。

刻まれたラグズにも、変化は特にない。薄らと左右対称の翼を広げたハート型の紋様が浮かんでいる。

「ん、そういえば、オルトリンデにもこのルーンを教えてやらねば。あれにはプロトタイプしか渡していなかったからな」

統率个体オルトリンデ。三千年前から現代まで生き残った三騎のワルキューレの一騎であり、最も若い个体である。

スルーズやヒルドとは異なる形で感情を育んできたオルトリンデには、この愛のルーンを賜わしてやろうと思うのだ。



強制終了からの再起動開始。

意識覚醒に不備なし。

姉妹との同期不可。



運動機能に障害あり。外部からの拘束を受けているものと確定。

「……て、あれ？」

意識の浮上と共に、ヒルドは自分の置かれている状況を即座に理解した。そして、その上でそこに至る経緯が分からず、脳裏に無数のクエスチョンマークを浮かべた。

確か、自分はヴィズルとセックスをしていて、そこにオルトリンデがやってきたので一緒にしようかと誘ったのではなかったか。そして、オルトリンデが同意して、二人でヴィズルの相手をしようとした——  
——ヒルドの記憶はそこで途切れていた。

眼前には粉雪のように透明感のある肌を惜しげもなく曝した黒髪の妹の背中が見える。綺麗な形をしたお尻が上下に激しく動いていて、その下で寝そべるヴィズルのペニスにむしゃぶりついている。

オルトリンデがヴィズルと結合している、というのは見れば分かる。

冷静沈着な末の妹の、あられもない乱れた姿は希少だし、聞こえてくる淫らかな喘ぎ声は、本当にオルトリンデの口から出ているのかと疑ってしまうのだが、その声を聞き間違えることはない。

ずちゅずちゅとねちっこい水音を立てながら、オルトリンデはヴィズルと事を構えている。

「……な、なんじゃこりゃー！？」

ガタンと音がする。ヒルドが立ち上がろうとして、無理矢理その行動を阻害された音である。

ヒルドはイスに座っていた。より厳密に言えば、縛り付けられている。ワルキューレの力を拘束できる鎖も縄も、この世界には存在しないが、それが原初のルーンに由来するものであれば話は別だ。ヒルドは自分を縛り付ける氷の縄が高度なルーンによるものとすぐに看破した。

もがけども抜け出せそうにない。オルトリンデがこのルーンを刻んだのだとすれば、解呪は相当に困難だ。

ワルキューレの個体能力に大きな違いはない。というか、そもそも同一スペックなので、魔術師としても同格である。となれば、必然的

に先手を取ったほうが有利になる。

完全に後手に回ったヒルドには、逆転の目はないといっても過言ではなかった。

「ちよつと、オルトリンデ!? これ、どういうことかな!？」

「……ヒルド、目が覚めましたか。ん、あ……あまり、動くと倒れるから危ないです……ん、ふう、あ。そろそろだとは、ん、思っていました……んあ……んん……」

オルトリンデはヴィズルと繋がったまま、背後のヒルドを見遣った。

「あのー、あたし、何で縛られてるの?」

「それは……なんででしょう」

「ちよつと!？」

困り顔のオルトリンデは、首を傾げる。

「ヒルドを縛ったのは、わたしです。昏睡のルーンで眠らせたのも……でも、理由を聞かれると、上手く言葉にできません。ん……はあ……んん」

オルトリンデはヒルドとヴィズルが繋がっているのを見た時、言葉にできない不可解な思いに駆られたのだ。三千年以上の年月を重ねながらも変わる事のなかった精神性が、ここで軋んだ。他と共有されることのない、微かな揺らぎは、ヒルドの背に昏睡のルーンを刻み、ヴィズルから引き離してイスに縛り付けるという奇行となって現れたのである。

「何それ? どういうこと?」

「もうちよつと、待つてください。これが、終わったら、それ、解くので……ふう、ん♡ はあ、ん、んん……あふ、う、んん、はあ……」  
熱い吐息を漏らしながら、ヴィズルを求めるオルトリンデ。

白鳥礼装すら傍らに放り出して、衣服を脱ぎ捨てて、傷一つない綺麗な裸体を曝している。

小さな身体が跳ね上げられて、大きなペニスを膣に叩き込まれている。

愛液と精液に汚れた陰茎が妖しくぬめっていて、オルトリンデの膣

内から出たり入ったりしている。その光景をヒルドはまざまざと見せ付けられることになった。

「はあ、はあ、はあ、んああ♡ あふ、んあ、はあ……ヴィズル、ヴィズルう……はあ、ん、あん♡ ふう、ん、ああああ♡」

オルトリンデの温かい膣肉はふわりとしつつ、しつかりと締め付けてくる名器である。何度交わろうと飽きることのないそれを、ヴィズルのペニスをもう何百回と貫いてきた。

「ん、ふう、あふ、ん、はあ、はあ、はあ……ん、ふう、ん、あふつ……はあ、はあ、ん、ちゅつ、れろ……」

オルトリンデは、上体を起こしたヴィズルの首に手を回して密着し、激しい口付けを求めた。

「ふ、ん、ちゅ……ん、ん、れろお……はあ、はあ、んんん！ ちゅ、れろ、ふう、あ、ん、ちゅ……！」

舌と舌が互いに互いを求めて絡み合う。

自分の舌を使って相手の舌を犯しているかのような激しきで、ヴィズルとオルトリンデはキスをしている。

そんな光景を間近で見せ付けられて、参ってしまうのはヒルドである。

獣のように交じり合う二人と同じ空間にしながら、裸に剥かれた状態で身動きが取れないようにされているのだ。

目にも耳にも鼻にも毒だ。

目を閉じててもオルトリンデの喘ぎ声もギシギシというベッドの軋む音も聞こえてくる。

男と女のいやらしい臭いが、部屋中に充満している。ヒルドとオルトリンデがぶっ通しでヴィズルと交わったからだ。

（あのオルトリンデが、あんな顔するなんて……いいなあ、すごく気持ちよさそう）

ついさっきまではヒルドがオルトリンデのいるところにいたのだ。ヴィズルとするのは初めてだったが、とてもよかった。

（うーずるい、オルトリンデばかりあんなにしてもらって……あたしもけっこうしたけど、でも、あんなすごい……）

オルトリンデから出入りするヴィズルのペニスが気になって仕方がない。体液に濡れててらと鈍く光る陰茎が、堪らなく魅力的に見えた。

(三千年ぶりの勇士なのに、オルトリンデだけで独占するなんて、そんなのダメだよお……うう、あそこが切ない)

幼い顔立ちを色香の漂う淫蕩な表情に歪めたオルトリンデが快楽を貪っている。

それをまざまざと見せ付けられて、ヒルドは生唾を飲んだ。

「それ、いつ終わるの……」

ヒルドは小さな声で呟く。

オルトリンデは腰を振っている。上下に叩き付けるように動かし、たかと思えば、根元までペニスを咥え込んで、腰を捻るように動かす。(ああ、それ、角度変わって気持ちいいんだよねー)

何て、トコ顔を浮かべるオルトリンデの気持ちがよく分かるヒルドは他人事のように思う。

ヒルドは男ではないし、オルトリンデと交わったこともないが、ヴィズルにとってもオルトリンデの膣は相当に気持ちいいのだろう。何度も射精して、オルトリンデの膣を精が満たしているのが見取れる。

通常の男ならば、一回か二回射精すればしばらくは打ち止めだが、ヴィズルはかなりの性豪だ。ヒルドとオルトリンデを何時間も抱き続けて一向に衰える様子がない。

ヴァルハラに集った勇士ならば、これくらいできて当然ではある。

「やつと、ルーンが解けたぞ」

と、声を発したのはヴィズルだった。

「う、あ……ヴィズル。んん、うー」

ヴィズルの腰が跳ね上がったオルトリンデを突き上げた。

「急にルーンで縛ってきたから何事かと思ったぞ。ヒルドまであんなにして、どういうつもりだ？」

オルトリンデはヴィズルもルーンで拘束していたのである。

オーデイン直伝の原初のルーンは、ヴィズルをして脱出困難な強度

だった。

もつとも、強引な解呪をすればどうとでもなったが、オルトリンデへのフィードバックを考えて、順当な方法での解呪を優先していた。その結果、こうしてオルトリンデに執拗に絞られ続けることになったが、それは勇士として幸運なことだ。特に気にしていない。

しかしながら、仮にもオーデインによつて作られた神造兵装にも等しい勇士が、ワルキューレに逆レイプ染みたセックスをされるといのはいただけない。

よつて、そろそろ反撃に出なければならぬ頃合であった。

ヴィズルは自由を取り戻した両手でオルトリンデの尻肉をがっしりと掴むと、腰の動きと連動させて膣深くにペニスを押し込んだ。

「あふっ……あ、んああっ！」

オルトリンデの背中に電流が走る。

突き上げられるペニスが膣奥を抉る。

鋭く勢いのある突き上げが、肉の快楽を急上昇させた。

「ふあ、あふ、んんっ……あ、あ、あ、あ、ん、ふうあ、あ、あ、あ、ん、ふう、あ、ヴィズル……ひゃん♡ ふ、んふ、ご、めんなさい……あ、んあ、はあ、ヴィズルがヒルドと、ん、ずっと、して、た、から……はふ、んあ、わたしも、ん、あ、あ、あ、あ、ふぐう♡」

奥歯を噛み締めて、オルトリンデはぶるぶると震える。

「ヒルドとして、妬いたのか？」

「わか、分かりません。でも、はあ、はあ……ヒルドだけ、じゃなくて、わたしも、ん、もつと、したい、は——あ、ん、うふうう……♡」

オルトリンデ自身、自分の感情の起伏に戸惑っている。ワルキューレには本来備わっていないはずの独自の感情は、システム上のバグと言つても過言ではない。通常ならば、容認しない変化ではある。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、んああ、はあ、気持ち、イイ……ヴィズルのが、わたしに、こんなあ♡ はあ、ん、精子、またいっぱい、出してください……もつと、愛して……はあ、あ、ん、ふうふう♡」

ぐりぐりと腰を回してペニスを膣圧を加える。

もう何時間も繋がり続けていて、オルトリンデの膣道はヴィズルのペニスの形を覚え込んでいるようでもあった。

「きゃん……」

オルトリンデは突然にベッド上に投げ出される。ヴィズルが急に体位を変えたためだ。オルトリンデの背後を取ったヴィズルは、そのまま四つんばいになったオルトリンデの膣にペニスを押し込む。

「ん——んんんんんんッ！」

搾り出すような声を漏らしたオルトリンデは、しかし、苦しげな様子はなく、むしろ恍惚に蕩けているようだった。

「あつ、あつ、あつ、あつ、んあ、あ、あ、奥、届く、ん、ふう、あひつ、んん♡」

「勝手なことをしてくれたオルトリンデに、オシオキだ」

「あふう♡ あ、あん♡ あ、ご、めんなさい♡ はあ、んあ、あ、あん、あふ、んん、あふう♡ あ、あ、あ、ああう……んあ、あ、ああ、気持ち、イイです。あ、あ、ヴィズルの、オシオキ……ふぐ、う……んへあ♡」

オルトリンデをバックから付き捲るヴィズル。

一転して攻められる立場になったオルトリンデは、だらしなく淫蕩な表情を浮かべてヴィズルを受け入れている。

「う、あ……」

(本当に、あれがオルトリンデ？ あ、あんな、すごい……ヴィズルの太いのがあんなに激しく……あんな勇士チンポにあんな風に目茶苦茶にされたら、あたし……)

子宮がきゅんとしてしまう。

妹の痴態を見せ付けられて、それを自分と重ねてしまう。

「あ、な、何これ……」

急に昂ぶった身体。

ヒルドは自分の下腹部に視線を落とすと、そこには見たことのない紋様を浮かび上がっていた。ルーン魔術の系統だということしか分からないが、これが魔力を放ち、ヒルドの発情を誘っているようであった。

「お、オルトリンデ。これ、あたしに何かした？」

「それ、は……スカデイ様から戴いた、愛のルーン、です。ん、ふう、ああん♡」

「あ、愛のルーン？ なにそれ、聞いたことない、あつ」

快感が競りあがってくる感覚にヒルドは小さく呻く。

「スカデイ様が開發された、新しい魔術、だそうです。先日、使い捨てのそれをいただきました……愛を確かめるときに使うのだと、ん、ふう……ヒルドのほうが、必要、だと、んんん！」

話しながらオルトリンデはイっている。

その姿を見て、ヒルドもまた快感を得ている。

「さ、触ってもいないのに……これえ……う、うううっ」

ヒルドに刻まれたそれは、かなり強烈なルーンだった。

発情を促す効果があると思しい愛のルーンは、縛られて自慰もできないヒルドの身体に一方的に快楽を与え続けている。

(ルーンが存在を自覚した瞬間から一気に来たっ……ぞくぞくする、あそこが熱い、今すぐに掻き回したいいい♡)

ヒルドの秘所からは蜜が止めどなく流れ出ていてイスを湿らせている。

「愛、なんて、一番ダメなヤツ。ブリュンヒルデお姉様のこと、分かってるのにつ……あ、あ、ああ♡」

はあはあ、とヒルドは息を荒げる。

思い出すのはオーデインの最高傑作にして、ワルキューレの希望の星であった長姉ブリュンヒルデの失墜だ。

ブリュンヒルデが人間の勇士を愛し、狂ったが故に、あの光り輝くワルキューレは神性を剥奪され、人のように墮ち、そして破滅したのだ。

「はう、ん、あん、はああ、ふう、んん、あん、あ、あ、あ、ああ」  
オルトリンデとヴィズルの立場が逆転している。

オルトリンデは完全にヴィズルに組み敷かれて、抽送を受けている。何度も何度も突きこまれ、彼女の両足はヴィズルの腰に絡みついて、より深い挿入を求めていた。

「ああ、んああ、ふあああつ……あふうあ、あ、あ、あああ、あ、あ、あ、い、イクつ、んあ、あ、ん、んいいいいいい♡」

引きつったような嬌声で、オルトリンデは果てた。ヴィズルが秘所からペニスを引き抜くと、どろりと白い粘液が結合部から溢れ出す。

「うわあ、ヴィズル……すごい。はあ、はあ……」

ヒルドは身を乗り出すように、果てて前後不覚に陥ったオルトリンデと精を吐き出して尚有り余る精力を有するヴィズルを見つめていた。

（あの、ヴィズルのが来たら、あたしほんとにヤバイかも。愛なんて、絶対ダメなのに、あんなの見せられたら……）

「ね、ねえ、ヴィズル。その、それ……オルトリンデ終わったら、その、次、次、して、ね？」

ダメだと分かっているながら、欲求を止めることができない。

ヒルドは興奮気味にヴィズルに嘆願した。

「愛のルーン」が脈打つような気がする。どうにもならない疼きは子宮にまで届いている。ヒルドの女の部分が、男を受け入れたがって仕方がない。

「分かった。そうまで言うのなら、また相手をさせてもらう」

ヴィズルは立ち上がって、ヒルドに向かう。

オルトリンデと交わる前はずっとヒルドと繋がっていた。セックスに耽ってばかりだったので、時間の感覚が失われてしまっているが、そう前の話ではない。

改めてヒルドの前に立つ。ヴィズルのペニスは、衰えることなく天を突いている。

「はあ、はあ、はあ……ヴィズルの、まだ、元気」

間近で見ているだけでキyunキyunする。

「この、オルトリンデのルーンのせいなんだから……はあ、はあ、はあ、だから、これは、別、別だから。はあ、愛なんかじゃなくて、はあ、はあ、早く♡」

辛抱堪らないとばかりにヒルドはもじもじとしている。止めどなく溢れる愛液が、彼女の身体が如何に発情しているのかを表している。



る。

「解呪なんかいらなからつ、このままでいいから、ね？ ね？」

オルトリンデの拘束のルーンを解こうとしているヴィズルにヒルドは言う。無理矢理、斬って捨ててもよいのだが、ヒルドの柔肌を傷付けてはいけなさと丁寧な解呪を試みていたヴィズルだったが、彼女の発情状態はその僅かの手間すら惜しむほどだったのだろう。

「分かった。なら、このまま挿入してやる」

「えへへ、よろしくう」

まるで、お気に入りの玩具を手にレジに並ぶ子どものようにヒルドは無邪気な笑みを浮かべる。

そんなヒルドの秘所に、ヴィズルは凶悪なペニスを押し当てる。

（あ、あ、あ、来ちゃう。ヴィズルの剣が、あたしの膣内につ。あんなにガチガチになって、あたしを屈服させようとしてるっ）

一瞬先にまで迫った危機にヒルドは堪らなく興奮していた。

墮落への嫌悪と誘惑がヒルドの内心に渦巻いている。

そして、そんなヒルドの葛藤を知ってか知らずか、ヴィズルはヒルドの十分に潤った膣内にペニスを侵入させた。

「あつ、あつ、あああああああああああああああああ♡」

ヒルドは、想像を超える快感にショートしそうになった。

溜まりに溜まった欲求が炸裂したかに思えた。

膣内に挿入されたペニスが、媚肉を穿ち、押し広げて来る。あつと、いう間に奥に到達し、さらにその先まで進もうとしている。

「お、奥、奥に来てるっ、あ、あはっ……何これ、すごい♡ はあああ

♡ あ、オルトリンデとヴィズルの魔力、感じるよお♡」

ペニスに付着した体液がヒルドの中で溶け合っている。愛しい妹と勇士の魔力の残滓が自分の中で混ざり合っているようだった。

「ふう、動くぞ」

「んい♡ い、いひいつ♡ あ、あ、あ、あふっ、はあつ、はあ、んんっ」

ゆっくりとヴィズルは拘束されたままのヒルドを犯し始める。同時に拘束のルーンの解除も試みる。ヒルドの望みどおり即座の解呪は断念したが、このままでは抱きにくい。ヒルドを満足させつつ、彼

女の解放を進める。

「あん、あん、あん、んああ、あああああつ。これ、イイ、さすが、ヴィズルの……ふぐつ、はあ、あたしの中、ヴィズルでいっぱいだよ♡」  
念願の挿入を叶えられて、ヒルドはすっかり舞い上がってしまった。

この僅かの抽送で、軽く絶頂を迎えているくらいだ。

（ほんとのほんとにヤバイヤツつ。子宮が下りてくるのが分かつちゃう。愛、愛、愛なんて、愛なんていらぬ、のにつ。気持ちイイだけで、いいのに……これ、もつと欲しいよ♡）

オルトリンデに負けず劣らずのだからしない淫蕩な表情で、ヒルドは感慨に耽る。

墮落の誘惑が脳裏を過ぎった。

ペニスが抜けそうになるたびに、ギリギリの理性が自分を繋ぎ止めるが、子宮口を突かれるとそれも吹っ飛んでしまう。

「ふひつ、はあ、あはあ♡ 奥、奥だめなの♡ あ、あ、やめへえ、何も、考えられなくなるからあ、は、んあ、あ、あ、あ、それ、好きになっちゃう、からあ♡」

「好きになっていいんじゃないか？ 何かダメなのか？」

「ダメ、ダメだよお、だってワルキューレは、みんなのもので、それが、一人の勇士に執着するなんて、ダメなんだから、はあ、ああん♡ 気持ちイイだけで済ませないと、入れ込むのは、んん、ふうう、んい♡ やっぱ、それ、気持ちイイよお♡」

「分かったぞ。ヒルドの好み」

ずん、と子宮口まで突いてから、すぐに抜かないでそのまま奥に捻じ込むように腰を押し付ける。そうすると、ヒルドの膣内は悲鳴を上げるようにのたうって、陰茎をぎゅうぎゅうに締めてくる。

「んひいひいひいひいひい♡」

ヒルドが背中を反らして善がった。

「あー♡ あー♡ あー♡ あー♡」

まるで赤ちやんみたいに媚びた声で鳴く。

ぐりぐり、と子宮に捻じ込むようにペニスを押し付けていくと、ヒ

ルドの膣肉が悦びに湧き立った。そして、それは同時に苦痛とも思える強烈な快感をヒルドにもたらすことになる。

「ひい、——あ、ああん♡ や、やだあ、あ、また、イグっ、んひいひいひい♡」

（昂ぶって、昂ぶったまま全然戻って来れないっ。頭が溶ける、変になるっ……!）

ずちゆずちゆと粘液を滴らせて抽送が続けられる。内側から与えられる快感は、ヒルドの許容量をとうに超えたものとなっていた。

「あ、はあ、んあ、あ、あああ♡ きも、気持ちイイ♡ もう、これ、ダメえ♡ はあ、はあ、はあ、ん、ふう、ああ、ダメなお、ブリュンヒルデお姉様みたいに、なっっちゃ、あ、あ、ああ♡ ヴィズルのチンポ、いいのおお♡」

ぶんぶんと頭を振って理性を保とうとするヒルドだったが、口を突いて出るのは情けない嬌声と男に媚びて快感を求める言葉である。

「これは、ルーンの所為、オルトリンデの、ルーンの所為なんだから」ヒルドは嬉しそうに相好を崩しながら、快楽に言葉上では抗ってみせる。

鼠径部に刻まれた愛のルーンから、ヒルドは快感を得ていると言う。それが、どんな代物か、ヴィズルの理解は及ばない。

それならそれで、愉しめばいい。ワルキューレの事情は分からないが、こちらは人である。美しい女性と交われるというのは、願ったり叶ったりである。

「ごんな、ごんな、ありえないの、気持ちイイからって、堕ちるの、だめ、絶対、ごんな、あ、あ、ああ、だめ、来ちやう♡ 堕ち、堕ちるう♡」

ヒルドの膣内が急激に引き締まる。

墮落の誘惑に抗しきれなくなったヒルドが絶頂を迎え、ペニスを思い切り締め上げてきたからだ。

「あは♡ い、イッた、イッたあ♡ あ、あ、気持ちイイ……しゅごお、はふ、んああ、待ってよ、今、イッたばかりだからっ、ひあああ♡」ヒルドが果てたところで、ヴィズルが射精したわけではない。

ヒルドの膣内を蹂躪し、精を吐き出したいという欲求には抗し難い。

乱暴にヒルドの膣内を掻き回していく。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あつ、またつ、イグっ、そんな、目茶苦茶に、ひう、あ、あは♡ やめて、それ、最高すぎるっ。んふ、ふう、ふぐう♡ あ、ヴィズルのチンポ、チンポが、あたしの膣内であつ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ♡」

ペニスの膨らみを感じ取ったのはワルキューレならではの敏感さだろうか。勇士に奉仕するという生来のプログラムによるものか、ともあれ一瞬先の未来で生じる射精という現象をヒルドはしっかりと理解していた。そして、それが、今のヒルドにとって最も強烈な墮落への誘いであることも。

「ひ、ひああああああああああああああああああああ♡」  
喉が壊れてしまいそうなくらいに大きな嬌声を上げた。

膣奥に叩きつけられた精液。そこに込められたヴィズルの魔力に、ヒルドの身体が反応してしまう。明確に勇士に奉仕できたという満足感が引き出されて、すべてを投げ出して好意的に捉えてしまう。

「で、射精てる……ヴィズルの精液が、あたしの中……あはっ、は、あ、あ、これ、気持ちイイ♡ はあ、はあ、分かった、ケド、もう、無理……♡」

気力も魔力も萎え果てたヒルドは、膣奥の熱の余韻に耽った。

快樂と呼ぶには強烈に過ぎる感覚が、愛なのか否かは分からないが、とにかくヴィズルと繋がるのが、これまでにない快感であるという認識は持つてしまった。

オルトリンデが嵌るのも分かる。こんなもの、端から勝てる見込みはなかった。

「んぎん♡」

（嘘、ヴィズルまだ……なんて精力、最高すぎるっ。精液、奥にこすり付けて、あたしの子宮征服しようとしている♡ もうダメ、我慢できない。このまま目茶苦茶にされて、ヴィズル専用ワルキューレに改造されるんだあ♡）

「ああ、ああ、あああ、もつとイイの。もつと注いでよお♡ あたしの子宮、ヴィズルの精液で満たしてえ♡」

墮落は防ぎようがないと悟った。

他ならぬヒルド自身がその未来を望んでしまっている。逃れようのないヴィズルからの抽送は、受け入れる以外の選択肢がなく、全部受け入れてしまえば、気持ちイイ未来しか存在しない。

オルトリンデには悪いが、愛のルーンなんてものを刻んだ彼女が悪い。

墮落を正当化しつつ、ヒルドは快樂の沼に沈んでいった。



今頃、ヴィズルは統率個体が相手をしていることだろう。

中でもオルトリンデは、ヴィズルの生前からの付き合いであるという。

ラグナロクを越えた先で生まれたラグズは、ワルキューレの基本性を有してはいても発揮したことはなかった勇士と深く繋がるという統率個体のみが知る法悦を、魂なき人形であるはずのラグズが味わった。そこから、何かが変わったようではあって、その変化を自分の創造主は喜んでるように思えた。

「スカディ様。この愛のルーンのプロトタイプを、統率個体オルトリンデにお渡しされたとのことですが、どのようなものなのでしょう？」

「ん？ ああ、あれな。別になにもないぞ」

「ない？」

「ワルキューレの肉体は神性を帯びている。よって、生半なルーンは弾いてしまう。プロトタイプはあくまでも、ルーンをワルキューレの肉体に馴染ませることを目的にしたものであって、それ以上の効力はない。精神にも肉体にもなんら影響はないものだ。うん、まあ、よほど倒錯した趣味を持つ者なら、それで十分だろうが、さすがにワル

キューレにそこまで求めるのは酷だろうよ」

そうですか、とラグズは答える。

ラグズに刻まれた愛のルーンの効果も、いまいちよく分かってはいない。プロトタイプの改良品と思えば、何かしらの付属効果があるのだろうが、それは後から分かるのだろう。

ラグズはスカデイのようが終わったので、玉座の間を辞した。身体に問題がないことも分かったので、ヴィズルの世話に戻ることにしたのである。

他の量産個体と同期し、情報を集めたところ、ヴィズルの部屋にはオルトリンデとヒルドがいて、ずいぶんと長いこと出てきていないらしい。

(だからどうというわけではありませんが、勇士様のお世話を仰せつかったのはわたしです)

不意にそんな思いが湧き上がってくる。統率個体への造反とも取られかねない思考を咄嗟にカットとして、仲間とのリンクを切除する。

あまり、友を煩わせるなというスカデイからのアドバイスでもあった。

若干の異常は残っているようだが、仕事に支障はない。

スカデイからメンテの必要がないというお墨付きも得ているので、ラグズは早足で新たな日常に戻っていった。

## 6話

凍えた世界にも、生き物の姿はある。

ラグナロクの折、この世の大半の生物は死滅してしまっただが、生き残った人間と巨人、そして一部の魔獣は幸いにして現代まで命を繋いできた。それは奇跡というに相応しい出来事ではあった。

その奇跡は今でも続いている。

当の昔に滅び去っているはずの北欧神代が脈々と命脈を繋げているのだ。

見事なまでに美しい氷の城を遠目にヴィズルは道なき道に足を踏み入れた。雪は小康状態だ。ふわふわとした雪の塊が、時折思い出したように舞い降りてくる程度。雲間からは光の柱が覗くこともある。

「勇士様」

地面を覆う雪に足跡を残すことなく、中空を漂うワルキューレが話しかけてくる。

フードで顔を隠した少女——ヴィズルの傍仕えを命じられたという量産型ワルキューレの一騎ラグズである。フードの向こうから表情の読み取れない赤い瞳でヴィズルを見ている。

「どちらに行かれるのですか?」

「散歩だ。日がな一日城の中では気が滅入るだろう?」

「気が滅入る?」

ワルキューレ……特に量産型は感情が極めて希薄だ。人の姿に似ているが思考回路は全く異なるし、物事に対する認識や受け取り方も違う。彼女たちは自らに個を認めず、肉体を装置のようなものとして認識しているようだった。そういった考え方は人間をベースにしたヴィズルには理解できないものであった。

ラグズのみならず、量産型ワルキューレは同じ作業を何万通りも同じ手順で繰り返せるだろう。機械的な作業を機械的にこなすのに向いている。オルトリンデやヒルドならば、まだ別の反応もあっただろうが。

「城での生活にご不満があるのですか?」

「いや、それはない。まったくな」

「ならば、どういうことでしょうか？」

「なんとというか、生き物つてのは刺激がないとダメなんだってことだな。飽きるってヤツだ。窓から見える景色はいつも同じつてのは俺的にはよろしくない。偶には外に出て、身体を動かないと鈍っちゃう」

厳密には、すでに死人であるヴィズルに肉体的な停滞はない。しかし、こればかりは気分の問題も大きい。本質的にヴィズルは戦士だ。戦いもなく、停滞した景色に囚われている環境では、どうしても落ちて着かないのだ。外を出歩くだけでも、無聊の慰めにはなってくれる。

「どこぞに人間の集落があるみたいだな」

「はい、しかしそこは」

「立ち入り禁止だろう。分かってる」

ヴィズルに課せられた制約の一つが人間との接触の禁止だ。この世界の人間はその出生から死に至るまで完全に管理されている。何も知らず、どんな希望も抱かず、生まれてから死ぬまでがワンセットだ。そんな閉じた世界にヴィズルが足を踏み入れたら、どんな反応が返ってくるか想像もできない。

「人間は弱いからな。仕方がない」

人間は基本的に脆弱だ。厳しい自然の中では満足に生存することは不可能だ。まして、この神代北欧の環境は人間には過酷すぎる。常時雪が降り積もり、魔獣と巨人が跋扈する世界で、英雄と呼ばれる戦士もない。ワルキューレによる管理を受けなければ、日々の食にも事欠くであろう。この世界に人間の居場所など本来はないのだ。それを無理矢理スカデイが存続させているから人類種は生存を許されている。

今となつては人間は絶滅危惧種で、彼らの生存は小さな村の中だけで保障されている。

そして、この世界は人間の繁栄を許すほど余力はない。人間が食い荒らせるほどの資源はなく、人間の分け与えられるほどの命もない。どの道、この世界の人間に未来はないのだ。



「勇士様、この先、巨人種の生息域に入ります。ご注意ください」  
無機質な声音で忠告が入る。

「ああ、分かった」  
とだけヴィズルは答える。

巨人の生息域だということは初めから織り込み済みだ。何せ、そこが今日の目的地でもある。時折、魔獣の視線を感じることはある。しかし、戦闘は一度もなかった。一睨みすれば彼我の実力差を感じて彼らは去っていく。余計な殺生を禁じられているここでは、無意味な戦闘は避けるに越したことはない。

「おお……」

雪景色が一変して、花が咲く緑の大地が現れた。

とところどころから湯気が吹き上げている。

活火山の近くということであろうか。この一帯は気温が高く、雪化粧とは無縁の様子だ。暖かい空気が滞留しているのか、緑の野山が形成され、この極僅かなスポットが氷の世界のオアシスのように生物たちの憩いの場となっているのだった。

「懐かしき緑！ ははは、すばらしいな！」

これには思わずテンションも上がってしまうというものだ。

土と草花の香りなど、この世界の召喚されてから縁がなかったものだ。

山麓にぽつぽつと点在する温暖な場所は、あちらこちらから温水が吹きあがっている。氷に閉ざされた世界にあって、ここだけは大地の熱を感じることできる場所となっていた。

巨人種が寝そべり、水を飲み、のっそりと歩いている。氷よりも温暖な気候を好む性質であるという巨人たちは、この土地の熱を求めて集まっているということなのだろう。

結果、この緑ある領域は生態系の頂点に君臨する巨人種のものとなったのだった。

「勇士様、ご満足なさいましたか？」

「ああ、そうだな。ラグズはあまり関心がないか」

「何にでしょうか？」

「いや、いいんだ。そこまで重要な話じゃない」

量産型らしく、環境の変化に興味の欠片もないようだ。もつとも彼女たちにとっては氷原だろうが草原だろうが製造されてから当たり前存在した景色だ。別段、珍しくもないのだろう。

ヴィズルは足元に咲く花に目を落とした。指先に乗る程度の大きさの黄色い花をいくつも付けている。そこから一輪詰んで、ルーン魔術で結晶の中に閉じ込める。

小さな花を閉じ込めた透明な結晶に糸を通す。手早く作ったアクセサリーをラグズに手渡した。

「……これは？」

「首飾りだ」

「それは分かりますが、なぜわたしに？」

「ラグズは他の量産型と顔立ちが似すぎてるからな、それをつけてパッと見て分かるようにしといてくれ」

「わたしたちに個体の別は不要かと思いますが、勇士様が仰るのでしたらそのように」

ラグズは首飾りを首にかける。

個体識別の必要はないというラグズではあるが、相手にするヴィズルはそうはいかない。顔立ちが似すぎているといったが、実際には完全に同一だ。同じ型から作られた全く同じ肉体を持つワルキューレが量産型ワルキューレなのだ。記憶も感情も時共有しているという彼女たちを見た目で判別するのは困難だった。

「この場合、ありがとうございます、とお伝えすればよいのでしょうか」

「そうだな。まあ、一般的にはそうだろうな」

「承知しました。ありがとうございます、勇士様」

ラグズは少しだけ口角を上げて言った。

☆

その晩は晴れて、月がよく見えた。

水の城の一室で月明りに照らされたラグズが佇んでいる。

金色の髪も白い肌も青く澄んだ月光を吸って輝いている。深紅の瞳はさら紅く煌めいて、頬を朱に染め上げる。

衣服を取り払ったラグズに残されたのは、ヴィズルが与えた首飾りだけだ。

「それは外さないのか？」

「勇士様からいただいた物を外すことはできません」

ラグズは首飾りを指で撫でて、そう答えた。

少し前のことだ。

日が暮れて、城の明かりが消えたころ、首飾りのお礼がしたいとラグズがやってきた。

その時から心なしか頬に赤みを帯びていて、目がとろんとしていた。

「勇士様にお礼をしようにも、お渡しできるものもなく、わたしの自由になるものと言えはこの身体のみ。どうか、勇士様の好きなように扱っていただきたく」

と、部屋に入るなりラグズは言った。

「好きなように、か」

「はい」

「そうか」

さて、どうするか。

ヴィズルとしてはラグズを抱くことに抵抗はない。彼女とはすでにセックスをしているし、美女を抱けるのなら願ったり叶ったりである。

しかしながら気になることもある。突然の来室とラグズ自身が高揚しているように見えることだ。量産型ワルキューレにしては表情が豊かではないか。ヴィズルと関わることで個性が出てきたのか。それはそれで嬉しいことだが、そうなる少しばかり意地悪をしてみたくないのも男の性ではある。

「そうはいつでも、俺にはお礼はいらないぞ。気持ちありがたいが、無理する必要はない」

「無理ではありません。わたしは、勇士様に報いたいのです」

「変わったことを。『わたしは』と来たか……量産型としてでなく、ラグズとしてそう思ってるというように聞こえるな」

「それは……分かりません。しかし、首飾りをいただいたのがラグズである以上、ラグズが奉仕するのが筋ではないかと」

「他の個体と同期して判断したのか？」

「あ……同期はしていませんが……」

他の個体と同期するということ自体を今思い至ったというようにラグズは言葉に詰まった。

結局のところ、ヴィズルのもとに来たのは彼女独自の判断だ。

「そうだな、お礼というのならオルトリンデを呼んでくれ」

「統率個体を……？　しかし、それでは」

「お礼というのなら、それで十分だ。彼女を呼ぶ手間が省ける」

「あ……いえ、しかし……」

ラグズに浮かぶ迷いの感情。

主人と定めた相手からの命を拒否するなどあり得ない。そこに疑問を差し挟むこともまたあり得ない。ワルキューレは命令に対して問い投げかけることはない。ただ言われるがままに行動するだけの存在だ。そういうシステムなのだ。

しかし、ラグズは「オルトリンデを呼ぶ」という命令に抵抗してしまっている。本来ならば分かりましたの一言でオルトリンデを呼び出さなければならない。

「これは、どうして……勇士様の命を果たせない」

強烈な自己矛盾。

ワルキューレとしてヴィズルの命に正しく従わなければならないという当然の機能と従いたくないという正体不明のノイズがせめぎ合っている。

「いや、分かった。すまなかった。ちよつとした意地悪だよ。オルトリンデを呼ぶ必要はない」

「そう、ですか……」

ラグズはほつとしたように吐息を漏らす。

「申し訳ありません。少々ノイズが」

「そのノイズこそが感情ってヤツなんだけどな。俺みたいのを相手に感情を揺らがせてくれるのは嬉しい限りだけど、お礼なんて言葉に感情を包んでいるから、そんな意地悪もしてみたくなる」

「感情を包むとはどういうことでしょうか？」

「……そもそも、ラグズはどうして俺の部屋に来た？」

「先ほどもお伝えしたとおり、この首飾りのお礼をするためです」

「ああ、それも理由の一つではあるだろう。なら、どうしてそんなに物欲しそうにしているんだろうな？」

「物欲しそう……？」

ヴィズルはラグズに歩み寄った。

ラグズは意味が分からないと小首を傾げる。その一方で、頬は上気し、汗ばんでいる。いかにも発情しているという風である。

「俺の部屋に来た時に、どういうわけか発情していただろ？ それなのに、いかにも俺のためにお礼をしたいなんていうもんだから、意地悪してしまうのも仕方ないだろ？」

「発情というのは、どういう状態か分かりませんが……身体の変調は認めます」

「とりあえず、その前掛け捲ってみろ」

「はい、承知しました」

ワルキューレに共通する白い衣装の前掛けをラグズは言われた通りに捲り上げる。あらわになる白い下着。すでに濡れて、太ももまで雫が零れているほどだった。

「俺が触れてもいないのに、もう濡れているじゃないか。この部屋に来る前からだろう？」

「それは……その通りです」

「俺にお礼をしたという気持ちはありがたいが、その裏側にあつたのはもつと単純な気持ち……いや、目的だな。とてもシンプルに、セックスしたかったんだろう？ 初めから、そう言っていればよかったのに」

「それは人の肉欲です。ワルキューレにそのような情動はなく、わた

しの身体にそのような欲求が生じるのは不可解です。この変調の原因は、おそらくスカディ様より賜った愛のルーンだと考えますが」「愛のルーン？　なんか、ヒルドもそんなことを言っていたような」「統率個体ヒルドに刻まれたものは、プロトタイプと聞いています。わたしのこれは、その発展型とのことですよ」

そう言うラグズは前掛けをさらに上に捲り上げる。鼠径部までヴィズルに見せることになるが、そこにはハートを描く一対の翼の文様が刻まれていた。曇りのない白い肌に赤黒い魔力が脈動している。「これはまた見事な術式だな。スカディ様の手によるものだな。ヒルドのヤツとは比べられないくらいに精緻だ」

思わずその術式の美しさに見惚れてしまう。

ヴィズルもまた、北欧に伝わる原初のルーンをオーデインから授けられた魔法剣士の一人である。ラグズに刻まれたルーンがどれほど優れた逸品か、一目で分かる。そして、ラグズでは読み解けなかったその効力も察しがついた。

(なるほど、感情を高ぶらせる程度のものか。無から有を生み出しはしない。ラグズのもともとの感情を表出するだけか)

あまり、意味のない効力に思えるが、感情がそもそも存在しないと考えるレベルのワルキューレを変化させるには十分すぎる。感情があるということ的前提としたルーンだ。量産型ワルキューレは感情がないわけではないのだと、スカディ自身が認めただけだ。あるいは、感情の有無を想定していなかったが故に感情の芽生えを喜んでいいのか。

「ラグズ、これ、いつからだ？　いつからこのルーンは起動してる？」  
「勇士様から首飾りをいただいた時からです。その時はここまでの変調はありませんでしたが、城の戻ってから急に悪化しました」

「城に戻ってから？」

「はい」

「ずいぶんと時間が経ってるはずだけど」

ヴィズルとラグズが城に戻ったのは、まだ太陽が顔を出している時間帯だ。西の空が橙色に染まり始めたころである。

「……………ふう……………あつ」

急にラグズが膝が震えた。

顔を歪めて、熱い吐息を漏らす。滲み出る愛液の量が見るからに増えた。

「まさか、今イッたのか？ 触つてもいないのに？」

「分かり、ません。 勇士様の視線が気になって、そうしたら身体が不可思議な反応を示しました……………は、あ……………う」

「俺に見られただけで果てたのか。そういう才能があるのか？」

それはそれで興味深いことではある。

「城に戻ってから、今までどうしてたんだ？ こんなに股を濡らすほど感じてたんだらう？」

「もちろん、身体の変調に対応していました。このノイズを共有するわけにはいかないので、他個体との同期をカットした上で変調の解消に努めていました」

「解消？」

「この感覚は勇士様と交わった時の感覚に酷似しているため、同様に膣に刺激を与えれば変調を解消可能と推測しました」

「ほう……………それで、今の今まで一人で慰めていたってことか」

「身体の変調を放置することはできません。あくまでも、この個体の調整のための行為です……………は、あ……………ん……………」

ラグズの吐息が次第に色を帯びてくる。見るからに体温が上昇しているというように興奮の度合いが高まっているようだ。

「それで、調整の結果は？ 日が暮れてから、今までずっと、何時間もかけて調整してどうだった？」

「あ……………ん……………それは……………調整は難航して……………どういうわけか、何度上り詰めても解消には至らず、むしろ、悪化しているようにも思われます」

「上り詰めたか。何回イッた？ ワルキューレなのだから、記録は残っているだらう？」

「確実な記録は十五回です。それ以降は不明瞭です」

自慰で十五回も絶頂していて、満足するどころかどんどん欲求不満

を募らせるといいうのもすごい性欲だ。こればかりは愛のルーンの影響を受けてのものだろうが。

「不明瞭というのは解せないな……ワルキューレの記憶は人間のそれとは別だろう。記録として残すものじゃないのか？」

「詳細不明です。気が付けば夜が更けていたのです。記録も残してありません。ただ、疲労とより強まった変調のみが、は……あ、ふうッ」  
びく、びく、とラグズは全身を痙攣させた。そして膝から崩れ落ちる。

「あ……は、あ……か、身体が痺れて、力が抜ける……何故……こんな……勇士様に現況の報告を、しただけなのに」

顔を真っ赤にしてラグズは絶頂を迎えた。弄っているわけではない。ヴィズルに愛液に濡れた膣口を見られ、自慰の詳細の報告を自らの口から語った。それだけでラグズは今まで意識したこともない「羞恥心」からオーガズムに達したのだ。

「はあ……はあ……はあ……う、あ……あ……ゆ、勇士様……ノイズが、頭に溢れて……はあ、はあ、調整にご協力を、ふう、ふう……はあ……」

「だから初めからそう言えばよかったんだ。首飾りのお礼なんて綺麗な言葉で飾らないで、セックスしたいと言えば分かりがいいのに」

ラグズはぺたんとして床に座ったままヴィズルを見上げてくる。無機質だった表情はどこへやら、ラグズの表情はすっかり熱を帯びている。

ラグズとしては性欲の自覚はまだない。人間を始めとする生き物たちの生殖活動を知ってはいても、自分の関わるものとは思っていない。もちろん、経験はある。勇士の相手をするのがワルキューレの仕事なのだから、機能も備わっている。しかし機能を有していることと自覚があるということは別問題だ。ラグズの中ではまだ曖昧だった個人としての欲望——ヴィズルと行為に及びたいという欲求を首飾りへのお礼をするという理由付けで包み込んだ。そう無理に解釈していたというだけだ。ラグズは嘘をついたわけではなく、自分の常識の中で自分の湧き上がった感覚にラベルを張っただけだ。



セックスをする理由を、自分が承知していない願望ではなく自分でも納得のいくお札にすり替えてしまった。愛のルーンも悪い方向で作用した。ラグズの願望がセックスであるのなら、自慰で解消することはできない。感情を表出させるルーンは性欲という形でラグズの願望を表出させたが、ヴィズルとのセックスでなければ満たされることはない。

「勇士様、この身体を調整してください」

ラグズは呼吸を荒げて懇願した。

機械染みたワルキューレではなく、愛らしい少女そのものの顔で頼んできたラグズを拒否することはできない。ヴィズルも意地悪を重ねた手前、拒絶はありえないことだ。

邪魔な衣服を脱いで、月光に素肌を曝すラグズを抱きしめる。すべての肌と肌を合わせて、唇を重ねる。柔らかな唇の感触は人間のそれと変わりが無い。

「勇士様のご奉仕します」

言うや否や、ラグズはヴィズルのペニスを手に取って、舌を伸ばした。湿った舌のざらつきが亀頭をゆっくりとなぞっていく。

「ん……………あ……………れろお」

はあはあ、と物欲しそうに吐息を吹き付けながらラグズの舌がペニスの上を這いまわる。赤い舌に粘性を増した涎が纏わりついていて、それがペニスに塗り付けられていく。

「れろ……………れろ……………れろ……………ん、ちゅ……………は、あう……………ん……………んじゅる……………ん、んんう♡」

舌先でペロペロと鈴口を舐めていたかと思えば、次の瞬間に喉奥までペニスを咥え込んでいた。

深くペニスを頬張ったままラグズは舌を蠢かせた。裏筋を舐めて鈴口をチロチロと愛撫し、頬を窄めて啜り上げる。

「じゅるるるるッ……………じゅるるるッ……………んふ、はあ……………んふう……………ふう……………んん……………じゅる……………ちゅぶ……………んん……………はふう♡んああ♡んむ……………じゅるるる……………！」

激しく音を立ててラグズは頭を前後に揺らした。

吸り、舌で舐めるだけでなく頭を振って棹から愛撫することも覚えていたのだ。

強い快感がペニスを襲う。

ラグズの小さな口の中でヴィズルのペニスが膨れ上がっていく。

「んん……ちゅぶ……ん、はああ……あ、勇士様、すっかりお元気になりました。ん……ちゅツ、はあ、れろお♡」

愛おしそうにラグズは棹にキスをしてカリ首を舌先で舐めていく。

滲み出る先走り液も零さないように舌で掬って飲んでいく。

「ラグズ、そろそろ挿入するぞ」

「はい……はあ……勇士様はそのままです。今宵はわたしが……ん」

ラグズはペニスを握ったままヴィズルの腰の上に跨る。ガニ股になつて自分の秘所にペニスの先端を導いた。

「ふ、う……い、れます……んんツ」

亀頭が膣口を押し広げる。

何時間も自慰に耽つて濡れに濡れた膣口はペニスを受け入れる準備も万端だ。

「ふう……はあ……あ、ん……んく……大きい……う……ん」

亀頭を飲み込んで、一番太い場所を乗り越えてからは一気に入る。すんとラグズは着地する。一番根本まで体重をかけて押し込んでしまう。

「ふツ、ん、ああ!？」

それはラグズにとつても想定外のことです、深々と一気に突き刺さつたペニスの圧が子宮を突き上げた。無自覚な欲望に塗れた子宮口が不意の一撃を受ける形となる。

「く、ひい♡ い、い♡」

ラグズは引きつった笑みを浮かべて痙攣する。

根元まで挿入しただけで、飛び上がらんばかりの快感が駆け巡ってきたのだ。

「あ、ああ……あ……あ」

堪らない、と熱い吐息を漏らしうつとりとするラグズ。

「これだけでイクのか。どうも、ラグズはこつち方面の素養があるみ



「ひい、はあ、あ——ふあ……はあ……んふう♡ あ、あ、あ、あ、ああッ……ん、ふああ♡ ひい、ひい、んひい♡」

ラグズの腰振りは徐々に激しさを増していく。根本まで飲み込んで引き出して、そして勢いよくまた奥までむしやぶりつく。肉襞は狂ったようにペニスを求め、精液欲しさに愛液に濡れた媚肉が絡みついてくる。

「はあ、はあ、はあ、んはあ♡ あ、うあ♡ はぐう♡ ふあ……はあ……あ、い、イイツ、ふう、はあ……これ、すごいです。はあ、はあ……の、ノイズが増して、ああッ、頭、いっぱい、なのにつ、ひい、ああッ」

腰をくねらせラグズは乱れる。

噴き出す汗が金色の髪に吸われて肌に張り付いてる。月光を弾く妖艶な白い肌が汗でしつとりと濡れているのだ。

そんなラグズの腰をヴィズルは両手で掴んだ。形の良い尻肉を撫でてから、しっかりとラグズが逃げられないよう抑えて腰を打ち込む。

「は——ひい♡」

ラグズは舌を突き出して、ヴィズルの暴挙に喘いだ。

「あ、うあ……勇士様、そんないきなりッ」

「ああ、俺もしてもらってばかりは申し訳ないからな」

「ひい、ああ……ああ……んああ……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あッ、んふあ……あ、んひい♡ はあー、はあー、あがッ、あ、んあ、はへああ♡」

自分のペースを維持できなくなったラグズはますます乱れた。意識も半分なくしているかもしれない。

とにかく快樂を貪るために腰を振り続ける。

「勇士様、勇士様、勇士様あ——んあ、んあ、んああ♡ はあー♡ はあー♡ はあー♡ 調整を、もつと……わたしに、ん、ふう♡ はあ、あ、あ、ああ♡」

ラグズはヴィズルに身体を預ける。唇を寄せて、キスを求めた。情動的な行動だ。本人に自覚はないだろう。舌を絡ませて涎を交換し

ながら、腰を交えている。

「んふ……ちゅ……れろお♡ はあ、はああ♡ あ、んちゅ……ん、ふう……勇士様あ♡ はああ♡ んあ、い、イイ、んふ♡ はあ……あ、んあ、んああ♡」

ラグズの全身に緊張が走ったのをヴィズルは見逃さなかった。

「イクのか？」

「あ、あ、あッ、はい♡ ひい、あ……あ、来ますッ、わたし、あの感覚がッ、イクのが、来きますッ」

パンパンパンと強く腰を打ち付ける。

ペニスの先端が子宮口を叩く。

媚肉が抉られて燃えるような快楽が脳まで吹き上がっていく。

「あ——あ、い、イクッ、勇士様のペニスで、イキ、ます♡」

「いいぞ、好きなだけイケ、ラグズ」

「んひいああああああああああああああ♡」

ラグズの絶叫が迸る。

同時にヴィズルも射精する。

待ちわびたオスの精が子宮まで注ぎ込まれて、ラグズの頭の中がノイズで満ち溢れる。

強烈なオーガズムの感覚にラグズは溺れた。

疲労困憊。しかし、何度絶頂しても味わえなかった満足感をラグズは味わえた。

「ふう……んふう……ちゅ……れちゅ……んん……はあ……勇士様……勇士様あ♡」

ラグズはペニスを膣肉で擦りながらヴィズルに甘えた声で迫る。口づけを交わし、舌を吸い、腰を捻る。身体を密着させて、相手のすべてを食ろうとでもいうように身体を重ねる。

「ちゅ、ちゅ、れろお♡ はあ、はあ、はあ……んちゅ……ちゅぶ……れるお……はあ、あ、勇士様……もっと、調整してください……ちゅ……♡」

愛おしそうにキスを繰り返す。

ラグズの膣はヴィズルのペニスを掴んで離さない。まだまだ調整

は終わっていないというように、食らい付いたままだ。  
欲望に火が付いたラグズは、その晩、延々とヴィズルを求め続けた。

## 7話

冷たい氷の城の中で一騎のワルク्यूレが足取りも軽やかに歩いている。

白い衣を身に纏う天使のように愛らしい少女。桃色の髪をふわりと跳ねさせて、同じ顔をした量産型ワルク्यूレを横目に目的地までまっしぐらだ。

彼女の目的地は言うまでもなく、この城に召喚された唯一の勇士 ヴィズルの部屋である。時折外をぶらつくこともある彼だが、今は自室にすることは確認済みである。

(邪魔者なし。今日は二人きりでできる)

ワルク्यूレ三姉妹の次女、ヒルドは頬を赤らめてそう思う。

彼女の足取りを軽く——速めるもの、それは言うまでもなく人間でいうところの性欲であった。ワルク्यूレは人間とは違うというのは彼女たちの持論であり、事実、本質的に彼女たちは勇士と認められた相手に尽くすことを使命とする。よって、ヴィズルに奉仕するのはワルク्यूレの仕事の一つと言えばその通りだ。

(ヴィズルのことを考えると、お腹の奥がきゅんきゅんするんだよねー)

オルトリンデは個人的にヴィズルに執着しているようだし、彼に付き従う量産型もここのところ他の個体との差が出ているように思う。ワルク्यूレとしてはありえないことであり、バグであるがヒルドも人のことは言えない。一言で言えばやりたいのである。個人の欲求で動いている以上、彼女も本来のシステムマッチなワルク्यूレから外れてしまっている。

「ヴィズルー、いるよね？ 入るよー！」

返事を待たずにヒルドは部屋の中に入る。

ヴィズルは驚く様子もなくヒルドを迎え入れた。

「せめて、返事くらい待つのが礼儀だろう」

と、苦言を呈するヴィズル。

「あたしが来るの、分かってたでしょ？」

「まあ、それはね」

そう言つて肩をすくめるヴィズル。

ヒルドは別に自分の気配を消しているわけではない。彼女ほどの魔力の塊を察知できないヴィズルではなく、当然、部屋に入る前にはヒルドが来ていることを察していた。

「それで、何かあった？」

「え？ 何かつて？」

「いきなり来たからさ。スカディ様からの呼び出しでもあったか？」

「ないよ。ただ、あたしが来たかつただけ」

「来たかつただけ？」

「そうそう。でも、ヴィズルに用はあるんだ」

ヒルドは頬を朱に染めながら、一步、二歩とヴィズルに歩み寄る。

「ねえ、分かるでしょ？」

「また、オルトリンデが膨れるぞ」

「あたしはあたし、オルトリンデはオルトリンデ。ヴィズルが一人しかないんだから、仕方ないよ。今日はあの娘はお仕事でないしね」

ヒルドは白い歯を見せて笑みを浮かべる。オルトリンデを気にかけてはいるが、だからといって譲るつもりはまったくない。ワルキューレの仕事は勇士に奉仕することだ。オルトリンデのためだけに、ヒルドがそれを我慢する理由はない、と解釈する。

「ヴィズルだつて気が多いくせに」

「否定はしないな。ヒルドみたいに可愛い娘に言い寄られたら、ね」

「……そういうこと、他のワルキューレにも言ってるんでしょ？」

「どうだろう」

「悪い勇士だよ、ホントに」

そう言いながらもヒルドは満更でもなさそうだ。

手慰みに髪を手櫛で整えて、ヒルドはさらりと服を脱ぐ。追つて、ヴィズルも衣服を脱いだ。

柔らかいベッドの上で、ヴィズルとヒルドは互いに反対方向を向いて横たわる。両者の性器が目の前にあって、横向きにそれを眺めてい



る。

ヒルドはヴィズルのペニスを手に取って、優しく扱く。

「うわー、もうこんな大きくしてる。そんなにあたしとしたいの？」

「そっちこそ、何もしてないのに濡れてるじゃないか」

「んっ、そりゃ、ここまで来たらそうもなるっというか」

もともと、セックスしたかったのはヒルドのほうだ。ヒルドは服を脱ぐ前から受け入れ準備を終えている程度には発情していたのだ。

ヴィズルをからかってみた方がいいが、現状はヒルドのほうが不利ではある。だから、もう何も言わないでフェラチオを始めることにした。固くなったペニスをしっかりと支えながら、舌尖をチロチロと動かして先端部分を愛撫る。

「れる、れる、れる……ペロ」

ヒルドの舌が鈴口をなぞる。

小さな刺激ではあるが、敏感な場所を的確に舐めてくるので十分な刺激だ。思わずペニスが跳ねて、腰が引けてしまう。

「ん……ふふ、なんかびくびくしてるよ。ちゅ……ん、れる……逃がさないんだから、んむう、んちゅぶ」

ヒルドは亀頭まで啜える。ちゅうちゅうと吸いながら、口の中で舌を縦横無尽に蠢かせて亀頭を舐めしゃぶってくる。

「う……く」

ペニスを頬張られ、吸い立てられる感覚に呻くヴィズル。しかし、いつまでもヒルドの好きなようにさせておくこともない。ヴィズルもまたヒルドのクリトリスにキスをして、膣口を舐める。

「ひゃうっ、あっ……ふあっ、そこ」

ヒルドの可愛らしい悲鳴が下から聞こえる。顔が見えないのが残念ではあるが、表情以上にヒルドの膣口が彼女の気持ちを物語っていた。

物欲しそうにひくつく膣肉が丸見えだ。

天真爛漫な見た目と言動のヒルドだが、女性器は愛液を滴らせて男を求める娼婦のような卑猥さだ。そのギャップがまた男心をそそる。

「れる、れる、れる……ん、ちゅ……れる」

「あ、ふあう、ん……やあ、あ、恥ずかしい、よ……んむ、あふつ、あ、ん」

「ヒルド、もうびしょびしょじゃないか」

「い、いちいち言わなくていいんだよ、そういうことは。あむ……んちゆる、ヴィズルだって、こんなに腫らして、ちゆ、苦いの出してるくせに、ん、ふう、あう……んむう♡」

ヒルドは腰をひくつかせながら、懸命に口で奉仕を続ける。時に文句を言い、時に嬌声を上げながら、ヴィズルのクンニに全身を痙攣させつつ、口に含んだペニスは離さない。

「んふう、んふう……じゆる……じゆる……れる……んむう、ちゆぶ、ちゆぶ……はあう、ん……んむ、れるれる、じゆるる」

「れる、れる、れる……ちゆ……れるお……れるお……んふう、れるれる……ちゆ、じゆるる」

互いに互いの体液を啜り合う。そこに交じる魔力も身体に取り込んで、高め合っていく。ヴィズルの舌がクリトリスをなぞり、膣の中にまで入ってくる。ヒルドは呻きつつも、ペニスの側面を舐め、カリを舌先で愛撫し、鈴口にキスをして根本までペニスを飲み込んだ。

ぐぶぐぶと苦し気に音を立て、口の端から涎を垂らしてフェラチオを続ける。

「ん、んむう、はう……んじゆる……ちゆ……んあう……んむ……じゆる……んあ、んっ……れる……じゆる……口に、入りきらない……ん、くぶ……じゆぶ……れるれる……れろお♡」

ヒルドは愛おしそうにあらゆる角度からペニスを舐めて、しゃぶる。斜めに頬張り頬の粘膜に押し付けてみたし、亀頭の後ろ側を舐めたかと思えば裏筋をペロペロと舐めてくる。睾丸にもしゃぶりついて、皺の一つ一つを丹念になぞるように舌が蠢く。

負けてなるものかとヴィズルもヒルドへの愛撫を強める。舌だけでなく指も使ってヒルドの膣を弄る。クリトリスを舐めながら膣内に指を入れて、彼女の発情を促す。愛液を掻き出し、膣肉の柔らかさとしなやかさを指先で感じながら、Gスポットを擦る。

「ふあう♡ んあ、あ、やあつ、ご、強引、だなあ、んあ、ふうう♡」

ひあつ、あ、んん、ちゅ……れろお♡」

ペニスから滲み出る先走り液を舐めているだけで興奮してくる。そこにヴィズルの責めが加わって、ヒルドの身体はただただ熱く火照ってしまう。

（ああ、もう、早くこれ欲しい）

我慢ができなくなってくる。子宮が下りてきて、精液を欲しがっているのが分かってしまう。早くヴィズルに次の段階に進んでもらわないと気が変になってしまいそうだ。

「はむ、んじゅるる、じゅるるう♡ んふう、はふ、れろお♡ じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ♡」

ヒルドは頭を動かして、フェラチオのペースを上げた。ヴィズルのペニスをとにかくイカせるのだと意気込んだので高速フェラだ。

「んおつ、く、急にっ」

不意打ちに近いフェラチオはヴィズルの射精欲を著しく引き上げて、我慢する前に決壊させてしまった。

「ふぐ、んむう、んくっ！」

口の中で弾ける苦み。魔力。跳ねるペニスを舌と顎で押さえつけて、流し込まれる精液を飲み干していく。喉を鳴らして、待っていたと言わんばかりにヒルドは一滴も残さずすべての欲望を嚙下した。

「はああ♡ 濃い精液♡」

うっとりヒルドは射精を終えたペニスを眺めている。一発程度で収まるような、そんなやわな身体をしていない。ヴィズルのペニスは固いまま、ヒルドの顔に突き付けられている。

「ね、ねえ、ヴィズル、そろそろ」

「ああ、挿入してやる」

「えへへ、やった」

ヒルドは舌なめずりをして身体を起こした。

やっと待ち望んでいたセックスに突入できる。そう思うだけで子宮がきゅんきゅんしてしまう。

そんなヒルドを押し倒すように、四つん這いにさせたヴィズルは形の良い尻を二つに割って膣口を露にさせる。

そして、バックからヒルドの膣内にペニスを押し込んだ。

「ん——ふぐ、う♡」

ねじ込まれたペニスの圧迫感にヒルドは苦しそうに呻く。呻きながら、ヒルドの顔には笑みがあった。強烈な圧迫感に勝る快感が全身を痺れさせた。

「ひっ——あつ、あはっ、奥まで一気に来た」

「ああ、いいぞヒルド」

「ん、動いてえ」

媚びるようにヒルドは甘い声で囁く。

もちろん、とヴィズルは腰を前後させる。ヒルドの柔らかく、しかししっかりとしがみ付いてくる媚肉を振り払い、形を変えて、掻き回す。カ리를引つ掛けて、ポルチオを叩く。リズムカルに、最奥にねじ込みつつも細かく腰を動かした。

「んあ、んあ、んあ、んひ、ひいつ、あ、あ、んあ、ふああ♡ んあ、ひいう♡ はひっ♡ あ、あ、ああ♡」

ヒルドの尻肉を鷲掴みにして、ヴィズルは膣の感触を味わう、濡れた膣肉を引き裂いて、抉る。瑞々しい身体を犯して汚す悦びペニスに打ち震え、さらに固く大きくなる。一突きでヒルドが悲鳴を上げ、さらに突き込んでがっくりとベッドに倒れ伏す。尻だけ上げた状態のヒルドをさらに追い込むようにペニスを突きまくる。

「あつ、あつ、あつ、んぐう♡ ふへあ、あ、んああ♡ あ、あ、んぎう♡ ひぎいつ♡ あ、んああ、乱暴、に、そんなに、んへああ♡」

ガツン、と膣奥を叩かれてヒルドは舌を出して呻いた。

ヒルドを抱きしめると密着し、より急な角度でペニスを突き上げる。

「んふっ!? んお!? それ、深いっ!? あ、んお、お、!?」

強烈な快感でヒルドは野太く呻いた。そんなヒルドの口をヴィズルは塞ぐ。指を口の中に押し込んで、しゃぶらせながら、腰を叩き付ける。

「ふぐっ……んぐっ、んむう、んあつ、あふ、あつ、深い、んあ、お、お、んむう♡」

ヒルドを無意識に舌を指に絡める。口を塞げず、享樂に耽りながら涎を零し、背後から押しつぶされるような抽挿を受けて悦ぶばかりだ。

パンパンパンパンと連続してペニスを打ち込まれる。

まるで杭のように戦乙女の身体を貫き、屈服させる。強引に勝敗を決する力強さがあった。ヒルドの膣が悲鳴にも似た痙攣を繰り返し、喉からは拉げた嬌声が漏れ出る。

「あ、あ、あ、んいいいっ、ひい、いあ、っ、ああっ、イク、イクっ。ああ、来ちやうっ♡」

ヒルドは絶頂の気配に狂ったような笑みを浮かべた。

全身を麻痺させるような猛烈な快感が昇ってくる。

「ああ、ヒルド、出すぞ、このまま」

「うん、うん、うん、いいよ！ 来て、ヴィズルっ！ あたしの膣内に、いっぱいっ！」

ヴィズルはヒルドの手を引っ張って上半身を起こさせる。背中を反らす姿勢になったヒルドはさらに深い結合を余儀なくされる。

より速く力強く押し込まれるペニス。ぐちゅぐちゅと愛液を零しながらヒルドは意識を飛ばしそうになる。

「ひあ、ひあ、ひあ、んあああああ、あああああああ、あああああああ、ああ、イク、イクのっ、気持ちイイの、いっぱい、あひっ、はあ、あ、あ、ああああ、ヴィズルうう♡」

締め付けが一段と強くなった。

カリ首に絡みつく媚肉が精液を欲しいと訴えかけてくる。

その要望に応じて、ヴィズルは思い切り精を吐き出した。

「ひい、い、あっ！」

ヒルドの膣の中で容赦のない射精が行われた。

弾けるペニスが白濁液を注ぎ込む。

「あ、あ、あああ……ヴィズルのがあたしの中で、何度も、いっぱい射精してる♡」

嬉しそうにヒルドはぶるぶると膣肉を震わせた。

快感が強すぎて目じりに涙を浮かべている。

膣内で二度、三度と精を吐き出したヴィズルは、繋がったままヒルドを仰向けにした。

「うあ、あ、ヴィズル？」

「うん？ お互い、一回じゃ終わらないだろ？」

「あ——んあつ、あ、あたし、今イツたばかりなんだけど」

「俺もそうだぞ」

ヴィズルはヒルドの最奥を突く。射精直後でありながら絶倫ペニスは健在だ。ヒルドの精液を溜め込んだ膣に追い打ちをかける。

「ひあああ♡ それ、すご、いい♡ あ、は♡ せ、精液、刷り込まれてるみたい、子宮に押し込まれてるの、分かつちゃう♡」

じゅぶり、と音を立ててヒルドの膣を犯す。

子宮が下りてきて、子宮口が開く。そこを目掛けるようにヴィズルのペニスが襲い掛かる。

「くひい♡ あひつ、んおおお♡ ダメ、ダメ、んああ♡ き、気持ちいい♡」

ヒルドは突かれるたびに軽くイク。

ヴィズルに抱き着いて、両足を腰に回し、しっかりと密着する。

ペニスが届いてはいけないところまで深々と刺さっているように思える。

「あひい♡ あ、あ、あ、ああ♡」

もはや、ヒルドは喘ぐことしかできない。

ただ気持ちいいという思いに支配され、自らも腰を振ってヴィズルの愛を求める。

「あ、あ、あつ、こんな、イイツ、ん、ひあつ、ああ、ああ、ああああ」  
自分が自分でなくなるような感覚がする。

制御できない快樂という毒が全身に回り、ヒルドの思考回路を焼く。

「ふぐううつ、あ、くう……ぎ、んあつ、あああ♡」

舌を突き出して悦楽の炎に身を焦がすヒルド。

ヒルドが感じれば感じるほど、ヴィズルのペニスを締め上げる力も強くなる。もつと快感が欲しいからヴィズルはヒルドを突き続ける。

「あぐ、んあ、はひい♡ イイ、イイのっ、これ、奥、滅茶苦茶にされるの、イイよお♡ はあ、はあ、もつと、もつと犯してっ、精液注ぎ込んでえ♡」

「言われなくても、そうするっ」

「あひあああっ♡」

ずずん、と下腹に衝撃。

ヒルドは白目を剥いて腰を浮かせる。反射的に背中を反らしてしまふ。そんなヒルドを追い込むようにヴィズルのピストン運動は加速する。

「あ、あ、ああっ、あ、んはああ♡ あ、ああ、ヴィズル、あたし、またイク、イクからっ、はあ、ああ、あキスして、キスしながら、イクたい♡」

甘えるようなヒルドの懇願にヴィズルは応えた。

挿挿は変わらず、ヒルドの絶頂を促しながら、口づけを交わす。

「んっ……んあ……んちゅ……へう、ん、れる、ちゅ……んんっ」

ヒルドとの口づけは甘く、蕩けるようで、ヴィズルの性欲を大きく刺激する。

がっしりとヒルドを掴み、ディープキスをしながら子宮口を目掛けて何度も刺突を続ける。

「んむ、んむう、ふむ、んちゅ、れる……んん、んふあ、あふ、ん、い、ん、イク、あ、ん、ふむうううううううううう♡」

ぎゅっヒルドはヴィズルを抱きしめて強く密着する。

要望の通りに口づけをしたままヒルドは果てたのだ。

ふさがった唇から嬌声が漏れ出て響く。ヴィズルの射精も同時に行われ、ヒルドの子宮にたっぷりと精が注ぎ込まれた。

「は——あっ、あ、んああああ♡」

涎の糸を引きながら唇を離す。

ヒルドは嬉しそうに相好を崩しながら茫然としていた。精液を注がれて強烈な絶頂を繰り返して、さすがに意識が限界を迎えたらしい。

「はああー、さすが勇士様だったね」

「何が」

行為を終えてから一息ついた。

ベッドに並んで横たわるヴィズルとヒルド。ヒルドはよいしょ、とさらにヴィズルに身体を寄せる。ほんのりと甘い香りがしてヒルドの存在をアピールしてくる。

「すごく気持ちよかった。ヴィズルとあだし、相性いいかもね」

「身体の相性？」

「うん。この身体、すごくヴィズルと繋がりがあってるんだもん。実際繋がってみて、想像以上によかったしね」

そう言いながらヒルドはヴィズルにすり寄った。胸に頭を預けて、足を絡ませてくる。

「でき、もうちよつと休んだら、続きしよ？」

「ヒルド、セックス好きすぎないか？」

「違うよ。これは、ワルキューレのお仕事。別にあたしが変態ってわけじゃないんだから」

むつと頬を膨らませるヒルドの頭をヴィズルは撫でた。無意識に愛らしいワルキューレに触れてみたくなった。

嬉しそうに目を細めたヒルドは、お返しとばかりにヴィズルの乳首に吸い付いてきた。ペニスに手を伸ばして、手淫を始める。

本当に、セックスを続けるつもりのようなのだ。

それならそれで全く構わない。ヒルドが望むままに応える。この美しいワルキューレが相手なら、何回戦でも戦えるはずだからだ。



## 8話

氷に閉ざされ、春を忘れた世界に佇むただ一つの城は、そのすべてが氷で形作られている。

見るも寒々しい氷の城ではあるが、その内部は不思議と温かい。

凍えることを知らない人ならざる城主とその手足となる戦女神ではあるが、だからといってまっとうな人間ならば数分で凍死するような環境を居住空間でも維持することはなかった。

もしも、外気と同じ環境で構わないのなら、そもそも城を建てる必要もない。彼女たちなりに好ましい環境というものはある。凍結し生命を育むことを忘れた大地は、決して城主たるスカデイの望むものではないのだから。

しかし、常に火が焚かれているというわけではない。

そもそも、この世界の木々は一部を除いて氷でできている。燃やせるものすら、僅かしかない。この巨大な城全体を常に暖めておけるだけの余力など、この世界には存在しない。

暖気の源は、城中に刻まれたルーン魔術だ。火を必要とせず、常に春の陽気を思わせる穏やかな温度を維持しているのだ。

スカデイが父なる神オーディンから授かった原初のルーンだ。

ルーンの奇跡は、およそ万能を言うに相応しい力がある。それを、生きた神であるスカデイが振えば、巨大な城を構築し、その内部を常に維持することなど造作もない。片手間のできる兎戯も同然の魔術である。

女神の恩恵を受ける当代唯一の勇士であるヴィズルの眼前に佇むのは、見上げんばかりの巨大な凶体をした怪物。

北欧神代に息づく巨人の一人である。

それが、今雄叫びを上げてヴィズルに躍りかかってきたのである。

武器は氷の柱だ。

少し前まで地面から生えていた氷樹を引き抜いたものだ。

巨人の腕力で振り回せば氷の柱であっても、魔獣を屠る一撃を生み出せる。

「弱い者いじめみたいで、あまり好きじゃないが、まあ、恨むなよ」  
ヴィズルは剣を抜いた。

シンプルなつくりの長剣である。磨き上げられた刃は、鏡のように輝き、禍々しい魔力が周囲の氷すら凍て付かせる。

剣を抜けば、後は斬るだけだ。

振りかぶって、思い切り刃を振う。

ただの一撃で巨人は氷の柱ごと両断されて倒れ伏した。

血と臓腑が白い雪を穢し、寒空の下で死体はあつという間に凍結していく。

「お見事です。さすがは勇士ヴィズル」

「ありがとう。けれど、賞賛に値するほどの仕事じゃない」

ヴィズルを褒めてくれたのは同行してきたスルーズだった。金色の髪を腰まで伸ばした、涼やかな美貌のワルク्यूレである。

現存するかつての神代をしるワルク्यूレ三騎の中では、長女になる。

「しかし、これでスカディ様のお心も休まるでしょう。彼の暴走は看過できませんでしたから」

「巨人の暴走か。俺からすれば、今のこの世界の有様は何もかも信じられないことばかりだ。巨人を仮面で制御するなど、想像もできないことだ」

巨人は神々とワルク्यूレ、そして人間の敵である。一部は共存の道を選んだ者もいるが、ラグナロクにおいては全面戦争となった相手である。

今、見る影もなく大人しくなった。巨人の知性を仮面で封じられ、スカディの支配下に納まっている。信じがたいことだった。

「獣が湧いてきたな」

「血の臭いに誘われてきたのでしょうか。如何しますか?」

「無益な殺生はしないんだろ? 相手にする必要はないよ」

魔獣が何体かかかってきたところで、脅威にはならない。

向かってくれば、撃退するが、そうでなければ進んで討伐するような相手ではない。なによりも、スカディは死を厭う。スカディの管理

下にある命は人であれ魔獣であれ等しく庇護される。

下手に神の勘気を被る必要はない。ヴィズルは命じられた仕事を終えた以上、この場に留まる理由はなかった。

氷の城の氷の部屋。

寒さに耐性のない生き物ならば、即座に凍り付き、命を散らせる世界の中で数少ない暖かい場所だ。壁も床も天井も氷でできているのに、触れても冷たくないのだ。魔術と権能の賜物と分かっているも奇妙なものだ。

「勇士ヴィズル。このまま楽にしてください」

静かにスルーズが言葉を紡ぐ。

ベッドの上で衣服を脱いだヴィズルにスルーズが迫ったのだ。

「今宵はわたしが奉仕します」

美しい戦女神にそう言われて、断る男はいない。ヴィズルは北欧戦士である。ワルキューレからの申し出を断る無礼は働かないし、ワルキューレの求めにはすべて応じる覚悟である。

スルーズの白磁のような白い肌がほんのりと赤らんでいる。

スルーズはヴィズルのペニスを手に取った。

すでに固く大きくなりつつあるそれを、上下に抜く。優しく包み込むように握りつつ、しっかりと力を込めて棹を絞るようにしている。

「今日のご活躍は勇士の名に恥じないものでした。わたしは旧きワルキューレ。あなたが今後も勇士としてあり続けられるよう、支援と奉仕は怠りません」

囁きながらスルーズはペニスを抜く。

吐息が亀頭にあたって、ぞくぞくする。

「大きくなってきましたね。それに、準備も整ってきたようです」

スルーズの手の中でむくむくと肥大化するペニス。柔らかな手に抜かれて、痛いくらいに腫れていく。スルーズはペニスを手に握ったまま、ヴィズルの身体をよじ登るように移動する。

「スルーズ」

「ん、そのまま……失礼します」

肩にかかっていたスルーズの髪が滑り落ちて、さらさらと身体を撫でる。真つ赤な瞳がすぐ目の前にやってきて、唇が塞がれた。

「ん、ふう……んん……」

スルーズはヴィズルの唇に吸い付くと、そのまま舌を入れてきた。舌先と舌先が触れあつて、それから上顎の奥のほうまでぬるりと入ってくる。ペニスを扱く手を止めることなく、ディープキスをしてくるのだ。視界は塞がれ、スルーズのいい匂いと舌技に蕩かされる。

「ん……ん……ちゅ……れる……れる……れる……ん、ん……ちゅ……んん——ふう」

唇を離すと銀色の糸が伸びた。

口元を拭ったスルーズが、今度はヴィズルの首にキスをして、そのまま身体を舐め始める。

チロチロと舌を這わせ、乳首にキスを落とし、舐るを繰り返す。

髪を耳の上に掻き揚げる仕草も色気があった。

やがて、スルーズはペニスの元に戻って来た。スルーズの奉仕によつて、ヴィズルのペニスは反りかえっている。

「あ……見事なたくましさです。さすがは、勇士の生殖器」

スルーズは驚いた風に見張ったが、すぐに相好を崩した。

そして、ペニスを手に取つて先端にキスをする。

「ちゅ……ん、ちゅう……ちゅぱ……ちゅ……ちゅ……ちゅう」

スルーズは先端から先走りを吸い出す。ストローで尿道の汁を吸い出そうとしているようだ。

微弱な刺激が物足りない。ヴィズルのペニスは焦らされているよ  
うで、ますます血気盛んになる。

「ぴくぴくとしていますね。すぐに、抜きますから……れるお♡」

スルーズは睾丸を優しく揉みながら、舌を裏筋に這わせる。ざらつく熱い舌がねつとりと絡みついてくる。

「ん……ん……あむ……ちゅ……じゅる……れる、れる……ん、ん、ん……じゅぷ……ちゅぷ……ちゅぷ……じゅる……じゅる……じゅる……じゅる……じゅる……ん、じゅぷ……ちゅぷ……じゅるる♡」

スルーズはペニスを啜えて、喉奥まで飲み込んでいく。そして頭を

ゆさゆさと前後させる。

「んふっ、ふうっ、ん……ん……ん……あ……ふうう♡ はあ……はあ……ん、ちゅ……れろお♡」

赤い舌が亀頭を行き来して、ぴちやぴちやと音を立てる。ペニスは全体が涎に塗れていて、射精したさに先走り汗を垂らしている。

「んちゅ……れる、ちゅ……んあ……ふう、あ、ん、ちゅ……ぺろ……ぺろ……んんっ、ちゅ……れろれろ……んじゅるる♡」

スルーズは熱心に口奉仕を続ける。

熱い口内に包まれて、舌が敏感な場所を愛撫する。鈴口を穿り、裏筋をこそぎ、亀頭を吸われる。溢れる涎が陰茎を伝って滴り落ちて、それを思い出したように舌で掬いとる。

「ふう、ふう……んむ……あ……んああ……れろれろ……どうですか、勇士ヴィズル。ちゅ……ちゅぱ……イケそうですか？」

「ああ、スルーズ。すぐくイイ。そのまま続けて」

「ん、はい……んむ……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ……んじゅぶ……」

一定のリズムでスルーズはフェラチオを続ける。

甘い刺激に腰が跳ねそうになる。このまま喉奥を貫き、大量の精液を叩きつけたいという衝動に襲われる。

スルーズは時に口休めのためか、口からペニスを出して陰茎を舌で舐り、睾丸の皺を舌先で伸ばすように舐める。そこから、ゆっくりと裏側から鈴口までを舐め上げていき、亀頭を啜って啜った。

我慢を続けるのももう限界だった。

精巣が全力で精液を生成している。このまま、この美しいワルキューレに放出しないのは、むしろもったいない。

「スルーズ、そのまま」

「ん……んぐっ」

びく、と腰が跳ねる。

スルーズの頭をヴィズルは押さえて、喉奥に挿入する。

「んぐ、んぐあ♡」

息苦しそうにスルーズは悶える。

それでも性欲を刺激されて暴発寸前のペニスは、彼女の身体を配慮しない。もとより、ワルキューレの身体は頑強だ。

「く……!!」

ヴィズルのペニスがついにその精を解き放つ。

「ふぐ……ん、んおおあっ♡」

どぴゅっ、びゆるるる!!

びくんびくんと口の中でペニスが踊る。濃密な白濁液が溢れて口の中を満たしていく。

「んぐ、ふぐっ、ん、んく……んんんんう♡」

二度、三度と射精する。

尿道に残った精液もスルーズの口の中に射精してしまう。

スルーズは口内に広がる苦みを伴う粘液に涙目になりながらも、しっかりとそれを飲み干した。

「ん……ちゅぷ……んは、あ……はあ……はあ……すごい量でしたね、

勇士ヴィズル。濃密な魔力で、あ……ん……」

スルーズの頭の羽が揺れる。

「スルーズ、今度はこっちの番だな」

「ん、あっー」

スルーズを抱き寄せて、ベッドに押し倒す。抵抗はなかった。むしろ、期待しているような表情で頬を染めている。

スルーズの透き通った白い肌は滑らかな絹のようで、ほどよい大きさの乳房にヴィズルは食い付いた。

「ん……く……あ」

乳首を舌先で舐め回しながら、スルーズの太ももの内側に手を伸ばす。暖かい場所だ。さわさわと手探りで股座をこじ開けて、秘所を探り当てる。

「濡れてる。フェエラで感じてたのか?」

「それは、ん……いつでも勇士ヴィズルを受け入れられるように、です。ん、く……確かに、あなたの魔力に当てられたところは、認めますが……んん、ふう……あっ……」

クリトリスを指で弾き、膣口を愛撫する。

くちゅくちゅともはや耳慣れた粘液の音が聞こえてくるのに時間はかからなかった。

「ふ、う……あ……ん……あ……あ……あ……あ……ん、ん……ふぐ、う……ん……ん……ん……ん……う……あ……う……ん……ん……」

ゆつくりと時間をかけてスルーズの身体に快感を流し込んでいく。  
膣肉は温かい。

スルーズはオーディンに作り出された戦女神だ。人の子ではない神造の存在だ。それでも、その整い過ぎた容貌を除けば、こころも人間としての機能を有している。

「指に絡みついてくるな、スルーズ」

「んく……あ、う……ん……はあ、はあ、はあ……ん……あ、あまり、そういったことを仰らないでください……く、う」

「でも、事実だ」

「それでも、です……ん、はあ、はあ……ふう……んく……あ」

スルーズは気恥ずかしそうにもじもじとし始めた。愛液の分泌量が上昇し、シートに染みを作るまでになったのだ。

「あ、く……あ……ん……なぜ、このように……はあ、あ……く、感じて……ん、ん……あ、ふうあ」

「スルーズは一人ですることはあるのか？ ものすごい濡れてきてるけど？」

「生殖活動を一人などでするのは、が……あ、ん……く、ありません！ ん、ん……く……ふう、う、う……ぐ……う……はあ、う」

スルーズの腰が勝手に跳ねてしまう。

ヴィズルの指がGスポットを探り当ててしまったのだ。突き上げるような質の違う快感がスルーズから自由を奪う。

「ふ——お!? んあっ!? あ、ふぐ……あ……んおっ、おっ……ふあ♡」

ひと際、高い声を上げるスルーズ。

「あ、何、これは、いったい……ひ、あ……ん、これ、が、快楽？ ん……ああん♡」

（勇士ヴィズルの指がわたしの体内を蠢いて、身体が勝手に……この

感覚、もどかしい)

スルーズの腰を抑えつつ、膣肉を解す。

愛液を掻き出しながら、しつかりと快感を与えていく。

スルーズをイカせるのは、実は簡単だった。

スルーズ自身は、特別敏感ではない。しかし、彼女の身体はオルトリンデヤヒルドと同じ型で作られている。ワルキューレ三姉妹は同型機である以上、感じ方もある程度に通っているのが道理だった。

オルトリンデとヒルドとは幾度も身体を交えた。スルーズの性感帯も、おおむね彼女たちと同じだったのだ。

「う……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あああ!？」

くちゆくちゆくちゆくちゆ、とスルーズのGスポットを責める。スルーズは小さく痙攣しながら、目を見開き、想像以上の快感に困惑している

腰を浮かせて、足を突っ張り、シーツを握りしめる。

「あ、うう……あつ、ん、く、来るっ、ん——ふあつ、あ、あ、あ、あ!」

「いいぞ、スルーズ。我慢するな。そのまま、受け入れろ」

「ふ、あ、ふあつ、あ、あ、ああ、イ、ク……あつ、あああ♡」

スルーズは大きく背中を反らして、舌を突き出した。

びくん、びくん、と仰け反りながら絶頂したのだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、これが、オーガズム、なのでですね。はあ、あ……あ……」

「スルーズも準備万端だな」

「う……ん……はい、勇士ヴィズル。どうぞ、わたしの膣内に来てください」

スルーズは自ら股を開いた。

ヴィズルが解した膣口は、アワビのように蠢いている。人間の乙女と同じ淫らに発情した媚肉を露にしているのだ。

そこにヴィズルは勃起したペニスを押し込んだ。

「く——ひ♡」

奥歯を噛み締めて、スルーズは挿入の圧迫感と快感を堪えた。



スルーズの膣内はとても熱い。ぬるりとしていて、肉褰が絡みついてくる。軟体動物の内部のように柔らかくしかししっかりとペニスを締め付けてくるのである。

「動くぞ」

スルーズの許可を得る前に、ヴィズルは腰を動かしていた。

固いペニスがスルーズの膣内を出たり入ったりする。

「ふぐっ、んぐっ、はあ、はあ、う……はあ……ん、く……はあ、く、大きいっ、ぐ、はあ、んふう……ふう……あっ」

スルーズは息苦しうにしながらも、きちんとヴィズルを受け入れている。

膣肉はみっちり隙間なくペニスを包み込み、圧迫してくる。ペニスを動かせば、媚肉が絡みついて奥に吸い込もうとしてくるようだった。

「く、気持ちいい」

「ふあ、ん、あつ、そう、ですか。ん、はあ……もつと、動いて構いません、よ……ん、あ、はあ、はあ、ふう、う」

「ああ、遠慮はしないからな」

「ふあああ♡」

ずぶり、とペニスを反らして奥深くに押し込む。

膣口を何度も貫く。

ポルチオに達したペニスは、そこを重点的に刺激する。

「あ、あ、んあ、んあ、あん、んあ、あ、さっきまでのと、また、違う……くはっ♡」

Gスポットの快感と異なる深く体内に浸透してくるような快感だ。スルーズの腰を掴んで、抽挿のペースを上げるヴィズル。

「んく……ふぐ……んあ……はあ、んあ、ああ、んあ、ふああ♡ あ、あ、あ、んっ、ふう、はあ、ああん♡」

スルーズの膣肉がぎちぎちに締め付けてくる。カリ首が褰に引っかかり、腰が抜けそうなくらいの快感を得てしまう。

快楽の熱は、スルーズの身体も焼いている。膣肉とペニスが擦れると、身体中が痙攣したように震えてしまう。

「ふう、はあ、んはあ♡ あ、く……奥、突かれると、ノイズが走って……ふう、お、お、んああ♡ ふあ、あ、くふう、あん♡ 思考回路が、おかしくなってしまう♡」

「そのままおかしくなってしまうばい」

「し、しかし……ん、あ、突く、突くのは、もう……あ、あ、あ、また、わたし……!」

スルーズはヴィズルの肩に腕を回し、ひっしと抱き着いた。

スルーズの汗混じりのいい匂いがして、ヴィズルを興奮させる。

「ぐ……スルーズ!」

「ふぐ、んは……ん、あ、あ、そんなに大きくしたら、くはっ……あ、あ、い、イイツ、イク、あ、んあ♡」

「射精する、ぞっ」

「あ、ああああああああああああああああああああああああああ♡」

膨大な魔力の塊が、スルーズの子宮を目掛けて放射された。

膣肉ががちりとペニスを押さえつけ、蠢いて射精の継続を求める。そこにスルーズの意思は関係がない。彼女の身体が勇士の魔力を欲しがってしまう。

「い、イクっ、イクっ……あ、あ、んああああ♡」

スルーズも腰を跳ね上げ、激しくオーガズムの大波に押し流される。

白濁液が結合部から溢れ出す。

(なんて、灼熱。これが勇士の精……♡)

スルーズはとろんとした表情を浮かべて絶頂を繰り返している。

勇士を求めるワルキューレの本能が、スルーズの理性を超越している。

「勇士ヴィズルっ」

「ん……!」

スルーズはペニスを挿入したままヴィズルに口づける。そして自ら腰を振り始めた。

「ん……ちゅぱ。はあ、はあ、もつと、ください。勇士の精をわたしの

膣内に」

深紅の瞳を煌めかせてスルーズはヴィズルに求めた。

両足をヴィズルの腰に回して逃げられないようにして、さらなる射精を欲しがったのだ。

「ああ、欲しいんならいくらでもくれてやる」

「は、はい……ありが、んお♡」

強引に挿入を再開するヴィズル。

スルーズは言葉が続かず、舌を突き出して絶頂する。敏感になった身体に、ヴィズルのペニスは容赦なく突き込まれる。

じゅぷじゅぷとワルキューレの膣から愛液と精液を混ぜ合わせた液体が掻き出されていく。ヴィズルはスルーズに全体重をかけるようにして、膣奥を開発する。

彼女の求めに応じ、幾度も射精して、一晩のうちに何度も交じり合い、犯し合ったのだった。